
払暁

100 y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

払暁

【Nコード】

N41730

【作者名】

100y

【あらすじ】

「賭けでもするか？」

戦場にてうっかり言った言葉を本気にされてしまった。

騎士と男装魔術師の、双方の思いがすれ違う。試練と葛藤の話。

第一話（前書き）

計画性？何それ美味しいの状態なので、内容が大きく変更したりあ
らすじから予測される内容とはズレが生じる危険性があります。こ
の点をふまえてお読み下さい。

第一話

私、遙の人生は齡二十と少しにして、既に波瀾に満ちている。

高校の時分、物質転移の魔術の探求をしていた辺境の老魔術師に誤って召還され、地に這い蹲る勢いの謝罪と共に二度と元の世界には帰られないと告げられた。

仕方なく身を立てる為に老魔術師を師と仰ぎ、魔術の道に進むこととする。

勉強に真面目な性分も幸いし、惜しみなく術を伝えてくれた師グライムに恥じぬ弟子と成れたと自負している。

けれども魔術師ながら己の寿命を伸ばす事を放棄していた師に、老いは確実に迫っていた。

静かに息を引き取ったのは、骨に凍みいる寒さの冬の朝のこと。以来俗世から離れ、一人村はずれの森の中で生活していた。

その世の中から隔絶された環境が良く無かったらしい。ある時、私に軍服の尋ね人が訪れた。

戦況が悪化した為、特殊職業人として戦場に出て欲しいとのお上の命令である。

始めそれは私の師に宛てたものであったので、無碍に断った。すると、ならば弟子の私に強制的に出る義務があるという。

仕方なく向かうことにしたが、女の身に不安を感じ、魔術を用いて男に化けてから出立した。

目立たないよう鳶色の髪と目にし、少年のような姿になったが女よりましたである。

そうして今現在、嘗て平和な女子高生であった筈の私は、戦禍の直中に立っていた。

銃などない、剣と鎧と魔術の世界。

しかし戦場というのは何処までも生臭さに代わりは無い。

肉の付いていた亡骸が、翌日には鼠に食われて骨になっている日々

だった。

後方からの支援攻撃が主な部隊に配属され、幸運にも剣術或いは騎馬部隊の連絡係よりは死亡率が低いと思われる。

「火線部隊、放てっ！！」

小隊長の声と共に、魔術師が一斉に火を扱った魔術を放つ。

目映い光が敵兵群がる野に広がった。

簡易な砦を境に我が国ローライツが若干高い位置に布陣している。相手取るヘリオットの国は野と木と森が散在するこの場所で、細波のように大挙して押し寄せていた。

今現在、砦の存在によって体制を持ちこたえているのが現状だった。戦争の始まりは主食の小麦のやりとりに関する些細な事だったらしい。

きっかけはそれだったにせよ、虎視眈々と領土拡大を狙っていた相手国との交渉は難航し結局開戦となってしまった。

元より相手側にはこちらとの話しに応じる気は無かったのだろう。攻めにくいとされていた所以であるローライツとヘリオットの間広がる樹海を抜け、遠路はるばる攻め込んできた。

私のような末端には、どうにも出来ない事である。

他の魔術師達に紛れ、私も駒として合図と共に下級の攻撃魔術と防御魔術を唱える。

魔術師は術を師から弟子に伝えるのみで、学校などで集団で基礎を教わる事はない。

お陰で集団で統率の取れた魔術を使用した時は、この様に下級か簡易の中級魔術で足並みを揃えるのだった。

勿論得意な分野が必要とされれば、その時に移動や臨時で向かわされる事も度々だ。

しかし大方、不得意な分野でも無理矢理この様に使わされるのが通常だった。

戦況は長らく膠着状態が続き一進一退を繰り返している。

長引きそうな様子に魔力の温存をしていた面々も、次第に精神的に

追いつめられて無駄に派手な魔術を放つ輩も現れ始めた。

戦場では待つ、という簡単な事も非常に忍耐を必要とする。

私も無駄な魔力を使わないように最低限の魔術で応戦するが、少し敵兵の姿が遠くに見えるだけで過剰反応しそうになるのを抑える事に苦労した。

日が落ちてても安眠出来る訳ではない。何時間か毎に交代で見張りをしなくてはならなかった。

昼夜の別なく緊張状態を強いられ、いつまでもこの状態が続くような感覚に陥ったとき、突然轟音が鳴り響いた。

「敵襲！！！！敵襲！！！！」

南門内側より地下から敵襲！！！！」

見張りの声が状況を知らせる。

慌てて見回すと、自分のいる直ぐ傍に敵兵が掘り進めていたと思われる大穴が出現し、次々と敵兵を吐き出していた。

誰しも顔を青くした。

今まで膠着状態だったのは皆があつたからである。

それをまさかこの様な形で内側から崩されるとは。

暗い夜に松明の明かりが灯り、急襲を知らせる。

「狼狽えるな！迎撃せよ！！」

魔術師部隊を率いる小隊長が応戦すべく命じるが、余りにも穴が近かつたために直ぐに混戦状態となつてしまった。

不幸中の幸いか、魔力の温存はしてあつたので思い思いに魔術師達は得意な魔術を放ち出す。

魔術師部隊と隣あつていた一般兵部隊も、穴からの進入を防ごうと弓と剣を持って奮戦した。

しかし予想も付かなかつた奇襲に、味方部隊は次々と倒れていく。

正に戦場は地獄絵図と化していた。

「オオオオオオオオオ！！」

怒声が飛び交い、私自身も向かつて来た敵兵を攻撃魔術で数人の命を刈った。

剣を避け、必死で自分の命を守っている内に、気づけば周囲に立っている味方の姿が見あたらぬ。

皆、地に伏せて動かなくなっていた。

「畜生！」

叫ぶ。けれど罵声すら、誰にも届かない。

こんな誰にも知られない場所で自分は死ぬのか。

どうせ殺すなら、この世界に来た時に殺せば良かったのだ！

世界か神か、誰かを呪う。

迫りくる死の前に、亡くなった師の言葉が蘇った。

魔術というものは想像する事が基本である。

魔力を如何に持っていたとしても、克明な想像が頭に無ければ大きく魔力を削られるだろう。

では、逆に想像が明確に出来ていればどうなるか。

答えは簡単だ。

僅かの魔力で莫大な影響を及ぼすことすら、可能である。

私の周りには、最早味方はいない。

今から行う事は嘗ての世界の理である。

生きるか死ぬか、さて。

想像する。私の魔力が微細な粒子となり、周囲に飛散していく様を。巻き上げられた粉のように、風に紛れて広がっていく。

それらの粒子は可燃性の火の魔力である。

大きく大きく膨れ上がった所で、私は小さな電撃を作った。

次の瞬間、巨大な爆発が周囲を飲み込んだ。

爆風に吹き飛ばされ、背中を強打する。

爆発の瞬間目を閉じてはいたが、それでも尚目が眩んだ。

聴覚も異常をきたしているらしい。

電子音の空耳以外、何も聞こえなかった。

それでも暫く耐えていると、目と耳が元通りに開いてくる。

目にようやく映った光景は、私がもたらした静寂だった。

「はは・・・皆、死んだのか」

あれだけ居た敵兵が、巨大な爆発に巻き込まれて死んでいる。敵兵を吐き出していた穴は、瓦礫で完全に埋まっていた。

あの中には更に多くの死者がいることだろう。

私たちを殺すべく掘進めてきた穴が、そのまま自分達の墓穴となったのである。

粉塵爆発と呼ばれたそれは、魔術の神秘と重なって恐ろしい武器となった。

周囲がこれだけ死んでいても自分が生き残ったのは、爆風に耐えるために圧縮した空気の結果を張ったからだ。

その私ですら、どうやら肋骨を何本か壊したらしい。

精神が高揚しているからか痛みは感じなかった。

緩慢な動作で体を動かして、爆発の中心地から遠ざかる。

遠ざかるにつれて敵兵の姿は見えなくなった。

代わりに呻き声をあげて体を痛みに震わせる味方の負傷兵と、敵兵にも爆発にも巻き込まれずに済んだ一般兵の姿が見られた。

彼等が生きていてくれた事に安堵する。

私は近くに居た、呻き声をあげる青年兵の傍に膝をついた。

彼は苦しげに腹を押さえていたので、服を剥いで様子を探る。

露わになったのは折れた剣である。深々と彼を貫いていた。

頭を動かし人体の内部構造を必死に思い出す。

医者など、気の利いた存在は後方でしか存在しない。

それまで彼の命を持たせるのは、前線に居る私達しか居なかった。

覚悟を決めて想像する。

細胞が分裂し、傷を覆う。

背中から順に再生再生再生再生。再生と同時に、剣を引き抜いた。

血管はどうか。出血の量を抑える。

傷ついた血管壁が分裂し、修復する。

大雑把ながらひとまず応急処置を終えた。

いくら元の場所で医療知識が溢れていたとはいえ、想像が及ばない

曖昧な部分が多い。

それは自分の魔力の消費量によって補った。

一人治療しただけで石を背負ったような疲労感があったが、構わず次の負傷兵の治療に取りかかる。

腕が無い者に血管が収縮する想像をして出血を抑える。

骨を風の刃で滑らかに削ると、皮膚を再生して断面を覆わせた。

抗生物質の代わりに、免疫機能を上げる想像で代替したが、結果が分かるのは後のことである。

休む間もなく次に移った。今度は魔術によって火傷を負わされた兵だ。

大気から綺麗な水を集めて表面を洗う。

皮膚の再生を終えると、脱水にならないよう水を飲ませて横に寝かせた。

次は裂傷を負った兵。次は矢を射られた兵。

次は、次は、次は、・・・。

とうとう普段魔術に安全に使えるとされる余剰の魔力も尽き、生命の維持の為に必要とされる分の魔力にすら手を出した。

数え切れない兵の傷を癒し続けた。

自分の起こした惨劇から逃れるかのように。

ふらつく体に鞭打ち、瓦礫の傍に座り込む一人の青年の傍に歩み寄る。

どうやら纏う鎧と格好から見て階級が上の方のようだ。

階級に関わらず治療をしていたので、足下にも及びそうにない方も

これが始めてではない。

同じように治療を施そうと着ている物に手をかける。

剥ぐと肩から大きく脇腹まで切りつけられていた。

治癒の魔術をかけようとする私の手を、誰かの手が押し止めた。

「私は・・・いい・・・。他の者を・・・」

大きな切り傷を負った青年自身の手だった。

「あなたは既に多くの血を失っています。後には回せません」

座り込む地面にも血が滴っている。予断を許さない状況だ。

それに加え周りの者で青年より重傷な者は、もう手を尽くしたか命を落としていた。

それでも青年はなおも私の手を拒む。

「私は・・・もう、いい」

のぞき込んでしまった瞳が諦めの色にしか無いことに気づいた。

生に希望を持たない、塗りつぶされた絶望の青。

今までの誰とも違うその目を見て、悟った。

「死を望むのか」

この男は、死に場所を求めて戦場に來たのだ。

無表情にこちらを見つめるその顔に、無性に腹が立った。

八つ当たりのように苛立った。

何故私がこんな所で大勢の人を殺し、味方の兵を助けなければいけないのか。

何故戦場に立たされているのか。生まれた故国でもないこの場所で今の状態全てが気に食わない。

一人満足げなこの男も気に食わない。

精神肉体共に限界などとうに越えていた。

「ふざけんじゃねえぞ」

気づけば感情のままに、口をついて言葉が出ていた。

厳しい上下関係など今の私に考える余裕はない。

「ここで死んでいい奴は、勝つために來た奴か、守るために來た奴だけなんだよ。」

お前みたいな負け犬が死ぬ場所じゃねえ!!!」

私ですら亡き師が愛したこの国を僅かに思う気持ちがあるから、逃げ出さずにこの戦場に來たのである。

守ろうとして散っていった英雄達と、ただの自殺志願者が同じになつては余りに前者が報われない。

青年は私の口調に驚いたか、目を見開いてこちらを見ていた。

彼の青目に僅かに光が生じる。

「ここまで言われてまだ死にたいのなら、賭でもするか？
俺が死んだら、家に帰って自殺でも好きにしな。

だが俺が生き延びたら、お前の捨てた一生を俺が拾ってやるよ。
俺の為に生きて俺の為に死ね」

どちらにせよ、この場所では死なせない。

青年は食い入るように私を見た。

その脳裏にどんな感情が渦巻いていたのか知らない。

けれども暫くして、眉を寄せて言った。

「それは私が死んだら、の間違いでは？」

「阿呆、俺が治すんだ。お前は死なないさ。」

どうやら私は彼の目に、健康な人間に見えるらしい。

実際は立つことすら出来ない状態だったが、外傷がないので傍目では分からない。

無抵抗になつた彼を震える手で治療する。

絞り出された命の魔力に心臓が悲鳴を上げた。

それでも無理矢理彼の傷を塞ぐと、終わる頃には足すら力が入らず横に倒れてしまった。

体制を立て直す為の腕の力も、全く入らない。

「おい、大丈夫か」

これで大丈夫に見えたら、お前の目は相当狂っている。

軽口を返す声さえ出せなかった。

感じる自分の命の小ささに、吹き込むような死を感じた。

本当に死んでしまいそうだ。全く。

「誰か！誰か彼を！！」

取り乱す青年の声。

諦めしか無かった彼の豊かな感情を見だし、酷く気分が良いまま私の意識は闇に溶けていった。

第二話

頭が重い。徹夜後の睡眠のような鈍い重さだ。

どうやら私は横に寝かされているらしい。

被せられた布団の重さと、快適な背中中の弾力から戦場ではないと判断する。

目映い光に眩みながら目を開けば、私は狭い一室で簡素なベッドの上に寝かせられていた。

ここは何処だろう。少なくとも、敵の捕虜ではない待遇だ。

ベッドからは窓が遠くて外が覗けない。

体を起こそうと腹に力を込めたが、鉛の体は頑として動かなかつた。ならば体を横にして寝返りを打つようにベッドから抜け出そうと考えた。

しかし、腕も持ち上がらない事に気づき諦めざるを得なかつた。

この状態は魔力を過剰消費した影響だろうか。

身動きもとれないので、大人しくその状態でじつと誰かの訪れを待っている、半刻過ぎてから妙齢の女性が扉を開いてやってきた。

掠れた声で私の現在の状態を聞く。答えは直ぐに返ってきた。

動きやすい作業服に身を包んだ彼女は、私の元いたところの看護婦のような仕事についていると言う。

もつとも、看護婦よりもずっと専門的知識について遅れてはいるが、今の場所は国境のヘダリオン樹海よりも少しローライツ側に入り込んだ位置にある中規模都市メディアの病院であるらしい。

野戦病院よりも二・三段は上級の軍病院である。

私のような身寄りもコネも無い、只の魔術師が入れる場所ではなかつた。

誰の計らいだ。

聞いてみたものの、私の体がまだ眠りを必要なのを見越してさっさ

と寝かしつけられてしまった。
悔しいが、彼女の言うとおり瞼を閉じれば直ぐに眠気に意識は浚われた。

次に起きた時には医者 of 男性が私の状態について説明をしてくれた。魔力の放出を支える全身の魔力孔が、焼き切れているらしい。体のエネルギーが上手く回らず、今は全身が脱力状態に陥っているという。

魔力を扱えるまでには時間がかかるだろうし、もしかしたら元には戻らない可能性もある。

しかも、体自体も一部力が入らなくなったり免疫力の低下等の後遺症が出る可能性も否定できない。

回復の時間と程度は個人差があるため明言出来ないと言われてしまった。

曖昧ではあったが、下手に断言されるより信頼出来る診断だった。魔力が制限されてしまい魔術師として不安があるが、命を落とす所だった事を考えると助かっただけマシである。

軍に籍を置いている者は優先して病院に居られるので、ベッドから追い出される事は考えなくて良いそうだ。

戦場で負った病は治療費も国持ちである。そこまで聞いて私の未来が、路上に投げ出されるような最悪の状態ではないと安堵した。

生活はとりあえず成り立っていけそうだ。
心に少しの落ち着きを取り戻す。

戦況についても聞きたかったのだが、医者は慌ただしく出て行ってしまった。

見たわけではないが恐らく外には傷病兵が溢れているのだろうし、医者を非難する気はおきなかった。

では次に来た看護婦にでも聞こうかと考えていたが、体は起きているのも辛いと直ぐに眠りに誘われる。無理に起きて弱っている体を痛めつけるのも本意ではない。仕方なくその誘いを受け入れた。

寝たきりの生活は暫く続いた。

段々と長く起きていられるようには変わったものの、折角起きても体は動かせず暇だけである。

戦場での喧騒が嘘のような穏やかさだった。

実は未だに私の体は戦場にあつて、死までの僅かな時の間に見せる幻に居るのかも知れない。

夢のような現実の代わりに、眠れば過去の夢を見た。

隣の戦友が次には頭を無くして倒れている。

少年の形を取る私を馬鹿にすることもなく、接してくれた優しい人だった。

場面は定まらず、気紛れに変わる。

次には私の放った赤い凶弾が、獣を狩るように人を屠った。

水風船のように弾けて小さな人影は動かなくなった。

最後はいつも決まってあの情景。

爆風と轟音と衝撃と、死者ばかりのあの……。

扉を叩く音で目が覚めた。

冷や汗を流しながら、自分が病院にいる事に気づく。

気づかないうちに昼の日差しでうたた寝していたらしい。

頭だけ動かして視線を向けると、看護婦が「起きていたのですね」と声をかけてきた。

「面会の方がいらつしやっています」

会つか会わないか選択を求められた。

名前を聞いたが、聞き覚えはない。

こんな場所で私に見舞ってくれる人が居ただろうかと、思い起こしたが該当するような人物は見あたらぬ。

そもそも私は人付き合いのある人間ではない。

追いつけずにもいかず、誰か分からないまま許可をだした。

「失礼します！」

張りのある声で入室して来たのは若い軍服の男だった。

濃い茶色の髪、愛嬌のある顔をした青年である。

緊張した顔で軍人らしい機敏さを見せながら、鮮やかな敬礼した。

「青鷲師団グルツ連隊第二歩兵部隊のバスカ・マルグです！」

面会を受け入れて下さり、身に余る光栄であります！」

「ご丁寧ありがとうございます。」

黒鷹師団ガルキーム連隊魔術兵部隊の遙・グラークです。

返礼をしたいのですが、体が動かさず申し訳ございません」

型どおりに返すと、マルグ殿は顔を青ざめさせる勢いで恐縮した。

魔術師として特殊な職業にあるため、一般兵より階級は上の位をいただいている。

しかし上官であるにしても、そこまでの大きな差でもない。

何故これほど恭しくされるのか不思議に思いながら彼を見た。

「とんでもございません、どうか楽になさって下さい」

「それではお言葉に甘えさせていただきます。」

それで・・・マルグ殿はどのようなご用件でしょうか？」

「はっ！」

彼は背を改めて反らすと、帽子を取って最敬礼で私に頭を下げた。

何事かと思う間もなく彼の言葉が耳に届く。

「グラーク様には先の戦場にて、命を捨ていただきました。

命の恩人がこの病院にて治療を受けていると聞き、居ても立ってもいられず面会に赴いた次第であります。」

そこで頭を下げたまま、深く息を吸いなおした。

「今の私がこうして生きているのは、偏にグラーク様のおかげであります。」

どうかお礼を述べさせて頂きたく思います。

・・・ありがとうございます」

純粋な言葉が胸に響いた。

私は、この人の命を助けられたのか。

良かった。本当に良かった。

戦場での私の行いは破壊だけでは無かったことに、気づかせて頂いた。

地獄のようなあの場所で、存在するのはそれだけでは無かったと。

「私こそ、ありがとうございます。」

どうか顔を上げて下さい。

貴方がそうして生きていてくれた事が、私にはとても嬉しい」

顔を綻ばせてそう彼に言った。

しかし再び頭を上げて見せたマルグ殿の目は、涙に塗れていた。

「グラーク様はこうして体も動かさずにあるというのに、命を救われた私は五体満足で立っている。」

申し訳なさに、身を切るような痛みを感じるのです」

ああ！貴方のような方を助けられた事こそ、光栄です。

「いいえ。・・・いいえマルグ殿。」

これは私が覚悟していた事なのです。

可能性を知っていて実行した行いです。

貴方が気に病む事ではありません」

彼はその言葉を聞くと涙で塗れた頬を袖で拭き、強い光を目に宿した。

「他にもないグラーツ様が仰るなら、私如きが口に出すことではございません。」

けれども覚えていて下さい。私は生涯この恩を忘れは致しません。

グラーツ様の手が足りぬ時、私をお呼び下されば何処へなりと馳せ参じましょう」

重々しい宣言である。

私は彼の言葉を聞きながらも心に全てを受け入れる事はせず、一線

を引いた気持ちで頷いた。

「分かりました。」

けれども今の言葉に囚われる必要も無いことも伝えておきましょう。今鼓動を打っているのは、私ではなく貴方自身でしかないのですから」

彼はゆっくりと瞬きし、噛みしめるように頷いた。

「はい」

それから彼に幾らか戦況について教えてもらった。

地下通路作戦での失敗で今はローライツ国側が優位な状態にあるらしい。

上層部はこの好機を逃さず停戦に持ち込むとの噂が流れていた。

悪くともしばらく膠着状態が続くだろうとの事だった。

そんな話をしていると、看護婦が定期的な検査をする為に部屋に入ってくる。

丁度話も区切りで、あまり長居しても体に良くないだろうと謙虚な姿勢で殿は一礼する。

「どうか、お元気で」

「貴方も」

私はその背中を温かい気持ちで最後まで見送った。

第三話

それから暫く、数日の間隔で私に面会人が現れた。

全て私が手当をした者達である。

当時は殆ど正気を無くして治療にあたっていた為どれ程の人数に手当を施したか覚えていないが、この頻度だとうやら当初想像していたよりも多いようだ。

最初のマルグ殿程ではないにしろ、会う人は誰も誠実であり真摯な態度で礼を尽くされた。有り難いことだった。

今日も同じように面会人が現れたと伝えられ、何時もと同じく寝たきりではあるもののせめて表情だけは引き締めてその人を迎える準備をする。

「失礼します」

声が扉の向こう側から聞こえた。成熟された低い声だ。

一人の男が扉を開いて入ってくる。

その姿に、私は驚かされた。

太陽の光に輝く金糸の髪と、晴天を映した青い瞳。

彫刻よりも整った顔に、彼のために在るような純白を基調とした騎士用の儀礼服。

腰には実用性を妨げないが美しい装飾の施された、一振りの剣が挿してある。

絵に描いたよりもそれらしい、一目で分かる騎士だった。

騎士の位は貴族階級に組み込まれているが、同時に軍事のエリートでもある。

王族に連なる高貴な方々の護衛任務だけでなく、戦時においては華々しく指揮も行う。

しがない一魔術師の私にとって、天上人である。

引き締めた顔も空しく呆けてしまった。

「ハルカ・グラーク様。

私はリカルド・メルツァース・ブラムデイと申します」

優雅極まりない一礼を目の前で披露された。

おそらく貴族式だと思われるが、流れるような所作は洗練されていた。

あまり顔を崩し続けるのも失礼かとせめて表の動揺は隠したが、内心は大嵐の直中に居る。

何故この様な方が私に会いに来るのだ。

「ブラムデイと申しますと、失礼かも知れませんが伯爵家の方でしょうか？」

「はい。父は伯爵の位を頂いております。

私自身は三男であります上、軍に在籍しているので騎士の位で御座います。

流石、博識でいらつしやる」

天に祝福された顔が綻ぶ。

それだけで部屋の中が花が咲き乱れたかのような鮮やかさに包まれた。

美人であるということは、微笑みだけで幸福な気持ちにさせてくれるらしい。

目の保養とはこの事か。

「それで、ブラムデイ卿は一体どのようなご用件でしょう。

私のような身に、ブラムデイ卿の望みが叶えられるとは思えません
が」

困惑を滲ませた声で問うと、彼は首を横に振る。

「いいえグラーク様。他の何人にも出来ない事です。

お忘れでしょうか、貴方様に命を助けて頂いた事を」

ブラムデイ卿の顔を見る。

私が手当した者の中に、居ただろうか。

正常な精神状態ではなかったたので、見逃した可能性は十分ある。

しかし、これだけ特徴的な顔であれば覚えていそうなものだった。

首を傾げる私に、ブラムデイ卿は残念な表情を浮かべた。

「覚えておられないようですね。」

「・・・仕方ありません、グラーク様は死の淵にいらっしやっただ倒れる前辺りに手当した者達の誰かだろうか。」

それまでは傍目には分からない位動き回っていた記憶がある。

ブラムデイ卿は遠い目をした後、その時の事を思い出したのか熱のこもった目で私を見つめた。

「戦場に毅然として在り、死を望むばかりの愚かな私を叱咤激励して導かれた。」

あれ程までに心を揺さぶられたことはありません」

叱咤した覚えがある人は一人しかいない。

まさか。いや、顔はどうだっただろう。」

土と煤にまみれて、くすんでいた為良く分からなかった気がする。

冷や汗が頬を流れた。

「グラーク様の瞳の奥に、私は生を見いだしたのです。」

貴方様が目の前でお倒れになった時は心臓が止まるかと思いました。その後到着した援軍に、治療を任せたのは私でございます」

間違いない。私が最後に八つ当たりした青年である。とんでもない事をしてしまった。

伯爵家の三男坊に罵声を浴びせたとは。

牢屋に入れられるかもしれない。

いや、曲がりなりにも命の恩人なので免れる事は出来るだろうか。待て待て。冷静になれ。」

今のところブラムデイ卿は好意的な態度である。

下手に騒いで勘気にふれるより、相手の出方を見るべきだ。

「・・・思い出しましたブラムデイ卿。傷の具合はどうでしょうか私が思い出したと告げると顔を輝かせた。」

この態度を素直に信じるなら報復目的ではなさそうだ。

しかし海千山千の貴族様である。まだ疑いは晴れない。

「血を止めて頂きましたし、後で治療者に治療させたので支障はあ

りません」

「それは良かった」

この拙なる私にも人様の助けが少しでも出来たなら、社会に居て良いのだと言われた気がする。

思わず頬を緩ませると、何故か顔を凝視されてしまった。

そんなに変な顔でもしていたらどうか。

暫く無言のままブラムディ卿は私を見ていたが、私が戸惑いながら見返している事に気づき小さく咳払いをした。

そしてベッドの傍に片膝をついて、視線の高さを同じにする。

視線を合わせる以上の他意はないのだろうか、おとぎ話の姫にもなった気分だ。

騎士様に膝をつかせる訳にはいかないのですそのまま居て欲しいと懇願しようとしたが、出ようとした声はブラムディ卿の言葉に遮られた。

「賭は成立し、グラーク様は勝者と成りました。

運命の神に祝福された方よ。

どうか証をお受け取りください」

そう厳かに言ったブラムディ卿は、頭を下げて騎士の礼をとる。

間違いなく視線を合わせる姿勢ではない。

騎士が主にするものである。

仰天したまま、ブラムディ卿の言葉の意味を咀嚼する。

かけ、かけとは何だろう。かけ書け欠け駆け賭・・・賭!?

今の今まで忘れていた自分の言葉が朧気ながら思い出される。

私が死んだら好きに死ね。

私が生きていたら、私の為に生きて私の為に死ね。

傲慢で不遜な態度が蘇った。

愚かしい事だ。思い上がりも甚だしい。

何という事だろう。

この青年はそれを生真面目にも実行しに来たのだ!

「受け取れません!」

ひきつった叫びが私の喉から発せられた。

「人が人を征するなど・・・！」

私はなんと馬鹿な事を言ったのか。

どうか生き延びたその命、自分の為にお使ください！」

ブラムディ卿は弾けるように顔を上げた。

険しく眉間を寄せた、怒りの表情がそこには在った。

「私は言った筈。

グラーク様の瞳の奥に、生を見いだしたと。

その言葉の意味を知って尚、私を突き放すのですか」

私は誰かに全てを捧げられるほど強い思いなど抱いた事は無い。

ましてや一度会っただけの私にこの様な真似をする彼の正気を疑った。

「時は移ろい、人は変わる。

今感じられているそれは一時の熱病のようなもの。

過ぎれば全て霞むでしょう。

私は一介の魔術師です。よくお考え直してください」

私が言ったのは、至極まともな意見であった。

けれどもブラムディ卿は愕然とした後、もどかしい思いを露わに言い募る。

「何故分かって下さらない。

私がどれだけ歓喜に満ちたか！」

言葉の通じない人間と話しているようだ。

理性的な私の言葉は、彼の感情に全く届かない。

ブラムディ卿に初めて恐怖を感じた。

狂人じみている。

私の心が離れていくのが分かったのだろう、動けない私の右手を徐に布団から掴み出す。

引き戻したかったが、未だに力の入らない無力な腕ではそれも不可能だった。

「騎士は貴族でもっとも下位に当たります。それも一代限りの儂いもの。」

けれども、騎士にのみ許された特権をご存じでしょうか。

今は廃れ知る人も殆ど居ない、禁呪の使用が許されている事を「そう言つて艶やかに笑う。

先ほどの花のようなものではない。毒めいた笑いだった。

彼の話すものに全く心当たりが無かったが、それでも嫌な予感だけはひしひしと感じられた。

「天の益荒男、夜の手弱女。我が誓いをお聞きあれ。」

眼前の鵬よ。汝が御霊我が主と定め、幾星霜を経て違ふことなし。涙するならば我が血肉によつて恥辱を濯ぐ。

笑い満ちる事あれば我が本望」

「何を……！」

朗々と語られる音は紛れもなく呪術のものである。

呪術は魔術とは異なり、どれも顔をしかめるような類のものが多く、それは魔力を使う魔術とは異なり、呪術は術者の思いを媒介にするからである。

そして正負に寄らず、術者は多大な負担を負う。

その負担の為に、呪術者の研鑽の殆どがそれを逃れる術に費やされる程である。

軽々しく行うものではない。

「止めて下さい！」

悲鳴も空しく、祝詞は止まらない。

「今こそ高らかに言祝ぎを。」

永久なる契りを交わさん」

捕まれていた右手の指先に、電流のような痛みが走った。

噛みつかれたのだ。

ブラムディ卿は黄金の睫を震わせて、感極まるとばかりに浮き出た

血玉を舌で舐めとった。

青い目は伏せられ、美味しい筈もないのに丹念に指先に口づける。余りにも絵になる光景に、一瞬全てを忘れて見とれてしまった。私の右手である事が申し訳ない美しさだった。

しかし、突如としてそれは破られる。

私の血を飲み込んだブラムディ卿の唇から、小虫のように黒々とした何かが這いだして来たのだ。

「・・・っ！」

息を呑んで硬直した。

よく見ると小さな虫のような物はどうやら小さな文字らしかった。次から次へと溢れ出て、鎖のように列を成して彼の体表を駆け巡る。それも一つ二つではない。

千や万を思わせる膨大な数に埋め尽くされ、髪の毛一筋すら元の色が分かる場所は無くなった。

すっかり黒に埋まった顔が笑う。瞳の中すら黒く染まっていた。

「これで私の思いが分かっていただけでしょうか」

無邪気なその声と共に黒い色が溶けて消えた。

後には何もなかったのような、元の美顔が戻っていた。

「ブラムディ卿、一体何をしたのですか!？」

「ご安心下さい。グラーク様の不利益になる事は御座いません。

私の身に、主の名を覚えさせただけのこと」

当然のような口調に目眩を感じた。

つまりこの男は、私に自分の存在を押し売りしたのである。

先ほどの文字は体に溶けて、今後もブラムディ卿を縛り続ける事だろう。

その量から察するに私が命じれば従わずにはいられない、最も強制力のある呪法に違いない。

「呪術の解き方は？」

「在りません。既に時の中に失われました」

それがにこやかに話す内容か。

「どうぞリカルドとお呼び下さい。」

私は最早、グラーツ様の従僕なのです」

「・・・貴方がここまで強引な方だと来る前に知っていれば、何と
しても入れなかったものを」

「その場合でも、入れて下さるまで何度も足を運んだことでしょう」
容易に毎日通う姿が想像でき、結局は逃れられない運命だったのか
もしれない。」

私はそれはもう大きな溜息を吐いた。

「リカルド、私はこの様に体すら満足に動かせない状態です。

下手したら一生このままかもしれません。」

貴方に下男のような仕事を任せる事もあるでしょう。」

それでも？」

「望む所です」

即答だった。

彼の気持ちは今では疑いようもない。

しかし、やはり問題も幾つか思い浮かぶ。

どう考えても平民の主に貴族の従では矛盾している。

色々第三者が言ってくる事もあるだろう。」

彼の実家はどうなのか。

伯爵家にとつて非常な不利益だと思われる。

目障りに思われたら殺されるかもしれない。

周囲には黙っているのが賢明だろう。」

それだけではなく経済的な問題もある。

「貴族に給料なんて払えませんよ、私・・・」

「構いません。幾つか事業に手を出しております。」

有能な人材にそちらの方は任せてありますので、ご安心下さい」

規模が違った。余計なお世話だった。

此処まで頑固な人間に初めて会った。完敗である。

「では私のことは遙と。グラークは師から貰った名前ですから」

「畏まりました、ハルカ様」

嬉しそうに私を仰ぐ人を見て、やはり立場が逆だろうと思わずには
いらなかった。

第四話*

私という人間は、生まれながらにして死んだも同然だと思っていた。恵まれた容姿、恵まれた生まれ。

人は私を祝福された選ばれた者だと感じるだろうし、事実何度もそう言われて育った。

しかし本質はまるで異なる。

妾だった母は幼くして死に、父には疎まれ続けた。

食事すら同席を許されず父の本妻に会えば罵倒される日々。これが『恵まれた』ものだとも言っのだろうか。

使用人達は誰一人として私に味方する者はいなかった。

助けを求めて視線を送る度にかわされるといふ事を何度も繰り返していれば、彼等が自分を救うことなど無いのだと幼くして悟った。成長してもそれは変わらない。

社交界に出る年齢になって初めて私に優しく接してくれる者達が現れたが、彼等も私が父に疎まれていると気付いた時点で早々に去っていった。

余り接触は無いが唯一私を拒絶していなかった兄弟達も、容姿に惹かれて彼らの思い人達が私に傾倒してから父と同じような目で見られるようになってしまった。

私から彼女達に声をかけた事さえ無い。

そんな事情は兄弟には届かなかった。

いよいよ居場所が無くなり、仕方なく家を出るために騎士を目指すこととする。

家を出てからの生活は穏やかで順風であったが、心の内は冷えきっていた。

誰も私を求めない。惹かれるのはこの呪われた容姿のみ。

そんな固定観念が払拭される事はなく、広く浅く人と関係した生活

するだけの日々が続いた。
しかしそれも次第に飽く。

国の情勢が悪化し、ヘリオット国との戦争が始まってから私は一も二もなく最前線に自ら志願した。

今が私の死に時だと感じたからだ。

しかしようやく終えられると感じた私の命は、なかなかしぶとく生きながらえる。

激しさを増す戦場で、何時までも私は戦い続けた。

転機は予想もしない方向から訪れる。

ある日突如として砦の内から現れた大穴に、とうとう敗戦と終焉を感じた。

安堵をもって迎え入れたそれを、薙ぎ払う巨大な閃光。

事情は分からなかった。

けれどもこの身の代わりに誰かが成してくれたのだらうと漠然と考えた。

私の身は既にその時深く傷つけられ、死も手を伸ばした直ぐ先にあ

る。
瓦礫に身を寄せてその時を待った。

座り込んでいると、視界に見慣れないものが映る。

少年の魔術師だった。

屈強な男達の中で一際目立つその姿を気まぐれに追っていると、彼が非常に優れた癒しの術者であると気付く。

少年はふらつきながらも多くの人に治癒を施し、しかもその精度は高かった。

遂にこの周囲の者を癒し終え、私の前にやって来る。

術を使おうとした少年の手を押し止めた。

「私は・・・いい・・・。他の者を・・・」

重傷な者は私以外に居なかったが、怪我の段階まで入れれば負傷者はまだ多い。

毅然とした態度で後には回せないと言る少年をさらに止めると、私

の望みを悟ったのだらう。

「死を望むのか」

その通りだった。

私を睨みつける目に怒りが灯る。

「ふざけんじゃねえぞ」

瞳の炎はあつという間に憤怒へと姿を変える。

あどけない顔でありながら、その表情は老成した大人のもの。

知らずの内に、宿る炎の激しさに見とれていた。

「ここで死んでいい奴は、勝つために来た奴か、守るために来た奴だけなんだよ」

突き刺さるような言葉が、一つ一つ心を穿つ。

彼の炎の中に、生の光が垣間見えた。

これが生か。これが消える事が死だというのか。

ならば私に今から訪れるのは死ではない。

只の消滅である。

「お前みたいな負け犬が死ぬ場所じゃねえ!!!」

反論の一つも浮かばなかった。

周りには屍が転がっていた。

それらは皆、少し前までこの少年のように炎を灯らし生きていた終焉の姿に相違ない。

身近に感じていた骸さえ、私には足下にも及ばぬ存在だったのだ。

呆然と見つめる私に、なおも彼は言い募る。

「ここまで言われてまだ死にたいのなら、賭でもするか？」

俺が死んだら、家に帰って自殺でも好きにしな。

だが俺が生き延びたら、お前の捨てた一生を俺が拾ってやるよ。

俺の為に生きて俺の為に死ね」

彼の為に。

普段ならば相手にする事さえしない、只の戯れ言である。

しかし今の私にはその言葉が何よりも尊いものを感じられた。

心が沸き立つ。

この光の側で居られたら、私はどんなにか幸せだろう。

私の意味は、存在は。

彼が求めて下さるならば・・・！

その瞬間、私は何者であるかも忘れていた。

只のリカルドとして、平伏せんばかりに崇拜の念を抱いた。

正しくそれを実行しようとした時、ふとした疑問が胸をよぎる。

「それは私が死んだら、の間違いでは？」

「阿呆、俺が治すんだ。お前は死なないさ。」

直前まで宿していた炎を消し、元の只の少年の顔になって彼は笑った。

こんな戦場にあるとも思えない、無邪気な笑みだ。

その表情を作れる彼は、一体どんな心を持った人なのだろう。

少年が私の傷を癒していく。

それをふりほどく真似をする気はもはや無い。

効果は劇的で、やはり優れた術者であると身を以て実感した。

しかし、治療が終わると同時に彼の体が大きく傾く。

彼自身が支えようとして伸ばした腕は、力も入らないのか支えられずに倒れてしまう。

「おい、大丈夫か？」

初めて感じる焦燥を胸に、少年の顔を覗き込む。

何かを言おうと口を少し動かしただけで、彼はそのまま動かない。

慌てて抱き上げると、その呼吸は脆弱だった。

何故今まで気付かなかったのだろうか。

これほど弱っていたというのに！

蝋燭の火が風に消されるように、彼の命も儚く消えようとしていた。周りに溢れる屍と同じ存在になろうとしていた。

置いていくなと強烈に願う。

私はその死を目前にして、私の求めるものが彼であったのだと悟る。

「誰か！誰か彼を！」

絶叫に近い声を上げて、治療出来る者を探したが見つからない。

この辺りに治療の出来る者は彼一人しかいなかったのだ。
失意に呑まれながら腕の中で少年を抱き続けていると、近くの兵士
が顔を見て叫んだ。

「こいつ・・・！俺は見たんだよ！

こいつがああ爆発を作ったんだ！！」

衝撃が雷となって身を貫いた。

辺りに居た兵士も皆、少年に目を奪われる。

あれほどの巨大な魔術を行使したのがこの腕の中の身だとは。

しかもその後、あれほどの人数を癒し続けたのである。

歴史に名を残す大魔術師の偉業だった。

失ってはならない。何としても。

どんな宝玉よりも尚慎重にその身を包む。

暫く後援軍が来るまで、微かな心音に耳を澄ませた。

第五話

従者というものを持つのは当然ながら初めての事だ。

何くれと無く世話をやいてくれる彼に戸惑いを隠せない。

リカルドは正装から身軽な格好へと服装を変えていた。

それでも庶民よりずっと質の良いものを着ていたし、小さめの剣を腰に挿している。

此処に居るべき人では無いと誰もが直ぐに気付くだろう。

しかし本人はそんな事に構わず、私に付いて離れなかった。

世話をされるのが落ち着かないので事ある毎に礼を述べていたが、その必要はないと穏やかに諭されてしまった。

「さあ、体に良いディアロスの実です。食べてみて下さい」

そういつて皮を剥いた赤い果実を見せる。

腕に力の入らない私の体を起こすと、食べやすい大きさにして口元まで持って寄せてくれた。

気分は親鳥に餌を貰う雛である。

大人しくそれを口に含むと、瑞々しさと甘さが口に広がった。

「おいしい」

「それは良かった。お気に召しましたか？」

「はい、とても」

「ならば又取り寄せましょう」

取り寄せないと手に入らない物だったのだろうか。

今気づいたが、故郷の果実にも負けない甘さである。

怖くて値段が聞けない。

その事は胸に押し込め、私は別の懸念事項をリカルドに尋ねた。

「所でリカルド、仕事は大丈夫なのですか？」

こうして世話されていますが、負担では」

「」安心下さい。

停戦の方向に文官達が頑張ってくれておりまして。

私のような騎士や最低限以上の兵に待機の命が出ております。

何かあれば直ぐに赴かなくてはなりません、近くに居る分には何処で待機しても変わらないでしょう」

「そうですか」

「とはいえ、停戦が実現するまで暫く時間がかかるようです。

ハルカ様は心安らかにお過ごし下さい」

中枢の人間の言葉だけに信頼性は高い。

停戦だからと手放して喜ぶには早いだろが、どうやら心配するよ
うな事は無さそうだ。

安心してベッドに体を沈み込ませた。

扉の向こう側に誰かが近づくと気配がし、小さくノックの音が響く。

私が返事を返すよりも早く、リカルドが問いかけた。

「何方でしょうか」

看護婦らしき女性の声が、体を清める為に来たと用件を簡潔に話す。
寝たきりで水浴びも出来ない私はその事が嬉しく、顔を綻ばせる。

是非お願いしますと、扉の向こうに居る彼女を迎え入れようとした
時だった。

「私が致しましょう」

私は作りかけた笑顔が微妙な形で固まるのを感じた。

今この男はなんと言ったか。

そう戸惑いの内にも、黄金の髪を持つ美しい男が体を拭くらしき白
い布と、湯の張った桶を抱いてベッドに近寄ってくる。似合わない
組み合わせだ。

リカルドは私の体を拭くつもりのようにだった。

柄にもなく非常に焦る。

普段意識の欠片にも上らないが、私の本性は女だ。

魔術師は往々にして性別を偽る事があり、その事実から見た目が
同性の場合であっても異性に接するような慎重さで対応する。

このように肌を晒させようとするなど、言語道断であった。

看護婦にされるなら、まだ女性であるし彼女達の仕事であるから耐えられたが。

少年に身をやつしてから魔術師以外では余り知られていない常識である事は気づいていたが、所属している魔術兵部隊から出なければそれを感じることも少なくともすっかり忘れていた。

私の服を脱がそうと、襟元に手をかけたリカルドを慌てて呼び止める。

「待って下さい、リカルド！」

「・・・どうしましたか？」

不思議そうに首を傾げながらも、彼はその手を引つ込めた。彼とて男の体に欲情する筈もないだろう。

このように私が気にする事がかえって申し訳なくも思う。安堵のため息を吐いて、尋ねた。

「貴方、今まで魔術師が周りに居たことが無いでしょう」

「その通りですが、何かご不快に思われましたか？」

不快という訳ではない。ただされると非常に困るだけの話だ。戸惑いに揺れる彼に首を振る。

「いえ。そうではなく・・・」

もしかすると、リカルドは少年の私だからこそ仕えようと思ったのかも知れない。

未来ある若者がこのように不自由な体となった事に同情したのではそう思うと口を開く事に勇気が必要だった。

今や彼の全ては私に逆らう事が出来ないのだから。その覚悟が過ちであったのなら、どれほど衝撃的で悲観する事だろう。

しかし黙っている訳にもいかない。

彼がその事を悔いるのならば、この場を立ち去らせ、二度と顔を見せずにいよう。そう心の中で思った。

意を決して、言葉を紡ぐ。

「私のこの姿は、魔術で偽ったものなのです」

その言葉を聞いた瞬間、リカルドは青い目を大きく開くと純粋な驚きの表情でこちらを見た。

人工物よりも整った顔でありながら浮かぶ豊かな感情は、彼が生をもちながら煌めく稀なる者だと知らしめる。

同じ人として生まれながら、このように人を引きつける魅力を持つ者は本当に珍しい。

何度も繰り返す思う。私には恐れ多い事だと。

ベッドの上で動けない体の私は、見上げて反応を伺う。

暫くの後、意外にもリカルドが浮かべたのは得心した顔だった。

「落ち着かれた方だとは思っておりました」

どうやら、偽った姿に違和感を感じていたらしい。

思いの外簡単に受け入れられた。

リカルドの中で、私が何であるかは重要な事ではないようだ。

それが嬉しく思えたが、益々自分の何処に彼が仕えようと思ったか分からない。

「ですが、それがどの様に関係が？」

私はこれまで性別に頓着せず振る舞ってきた。

今更女性らしく扱えと主張するのも気恥ずかしく思え、あえて遠回しな表現を使う。

「魔術師というのは姿を偽る事もある故に、過度の接触に慣れておりません。」

このようにされるのは・・・少し困ります」

断ったつもりだったが、彼は当然のように私の主張を退けた。

「私はハルカ様の僕。主の世話は僕の仕事ではありませんか」

「けれど、此処には看護婦の方もいらっしやいます。」

何もリカルドがしなくとも・・・」

「彼女が良いならば、私がしてはならない理由も無いでしょう」

「リカルドは騎士です。貴族です。」

病人の世話が仕事ではありません」

「騎士だからこそ、主の手になりたいのです」

主張は平行線のまま交わらない。

もどかしい私は、頭で考えるより先に口が勝手に開いていた。

「少なくとも、人目のある所では避けて下さい。」

私は貴方が従者である事を、広められたくありません！」

言ってしまうから、リカルドを傷つけるような物言いだったと気づく。

若干顔色を白くした彼に、慌てて弁明した。

「あの別に、従者である事が嫌な訳ではなく。ええ、決して。ただ何と言いますか。」

穏やかな生活を望むには、平民が騎士を従者に行っているというのは、人々の好奇心を刺激しかねないと」

「・・・畏まりました」

肌に血の気が戻っていたので、伝わったとは思う。

けれども、看護婦を呼び戻しに行ったその背中では哀愁漂うものだった。

第六話

どうやら本格的に撤退の準備が押し進められはじめ、主力軍は首都へ帰還するとの事だ。

勿論リカルドもその仕事に追われており、以前のように病院に頻繁に顔を出さなくなった。

おそらく、私がリカルドを従者として広められたくないと言ったことも関係しているだろう。

急に途絶えた見舞いを寂しいと思うどころか、落ち着いてしまふのは庶民として仕方のない事だった。彼は余りにも違い過ぎる。

身分というより、生まれによる環境の違い。その思考。その所作。対して自分は、泥臭さの抜けない只の特殊職業人。

気にしないのは無理だろう。

私は訪れた平穩を享受しながら、僅かに力の入るようになった手足のりハビリを始めてみていた。

手足が僅かに力が入るようになったので、調子に乗って寝返りでもうってみようと試みる。

誰かが来ない限り寝返りも出来ない状況から、ようやく抜け出せそうだ。

重心を少しずつずらし、腕を立てて上半身を支えようとする。けれども途中で力つきて体が崩れてしまった。

ベッドに倒れ込みそうになった迄はまだ良いが、その後がいけない。つかんだベッドの柵が外れ、その拍子に体がベッドからずり落ちてしまった。

痛みを覚悟して目を瞑る。

次の瞬間、やって来たのは痛みではなく柔らかな感触だった。

「・・・お怪我はありませんか？」

知った声に状況を確認すると、何故かリカルドが私の下敷きとなっ

ていた。

自分の体に痛みは無い。

「大丈夫です」

「それは良かった」

リカルドは崩れた体制の私の膝に手を回すと、子供を抱くように軽々とベッドに引き上げた。相変わらず、そつない動きである。

「ありがとうございます」

「・・・あの、何時からいらっしやっただんですか？」

「たった今です」

開いていたドアの向こうから落ちるのが見えたので。

間に合うかと肝が冷えました」

久しぶりに見るリカルドは笑みを浮かべていたが、疲労の色も同時にあつた。

要職であるし、忙しかった筈だ。

この場所へ来るにも時間を無理矢理作ったのではないだろうか。

「念の為、医者に見せましょう。幸いにも病院ですから」

「そこまでしなくても良いですよ。リカルドが助けてくれましたし」

「後から問題が出ることもございます」

「どうか私の為にもご自愛下さい」

私の為にも、と来たか。そう言われては断れない。

仕方なく呼ばれた医師の診察を受け入れた。

医師は頭や上半身を調べ何処にも痛みが無いことを確認すると、様子を见守るリカルドと私に気楽に言う。

「何の問題も無いでしょう」

「この程度なら心配するほどの事はございません」

「そうですか。ご苦労様です」

リカルドは目元を緩ませ、医師に礼を述べた。

「では私はこれで」

忙しそうに医師は出ていってしまった。

二人になった部屋で、リカルドに勝ち誇った笑みを向ける。

「何も無かつたでしょう?」

「結果論です」

「まあその通りですが。」

私よりリカルドの方がよほど病人のような顔をしています。

忙しい中、無理に来なくとも良いですよ」

無理に来るぐらいなら、体を休めて欲しい。

その思いから言った言葉に彼は寂しそうに苦笑する。

「つれない事を仰いますね。」

・・・それに、今日は顔を見に来ただけではありません」

「何ですか?」

「実は近日中に首都に帰還する事が正式に決まりました」

本当に停戦に向けて動き出しているのだ。にわかには実感が湧いた。

戦争が終わる。目の前の騎士は五体満足で家に帰る事が出来る。

心から笑って、それを喜んだ。

「おめでとうございます」

リカルドもそれに答えて微笑する。

「有り難うございます。」

一足先に戻ることになり、恐縮ですが」

そうか、リカルドとはもう会えないのかもしれない。

私は暫く病院から出ることは出来ないし、リカルドは首都に戻れば

仕事もあり病院まで来れないだろう。

主従といっても、二人の間の誓約である。

仕事も生活もある人間同士が、現実的に考えて傍に居続ける事は難

しい。

「寂しくなりますね」

しみじみと呟いた私に、リカルドは何処か落ちつき無い様子で視線

をずらした。

「それで、その事なのですが・・・」

少し間をおいて、私の目を見て言った。

「私の家にいらっしゃいませんか?」

「はい？」

予想していなかった申し出に、思わず聞き返してしまった。戸惑う私にリカルドは説明する。

「一度首都に戻った後、迎えを寄越します。

私の家でしたら、腕の良い専属医師もおりますし不自由はさせません。

使用人も口が堅い。治療に専念出来るでしょう。

いかがですか？」

有り難いが、そこまで負担してもらつのも悪く思う。

それに、私は今の病院暮らしにも慣れてきた。

体さえ動けるようになれば、私の暮らしてきた荒ら家に帰れば良い。それで元通りである。

「この病院でも、十分良くして頂いてます」

「そう仰らず。必ずやご満足いただけるようお伝えいたします」
不満があつて断っている訳ではない。

渋る私を見て、彼は顔を苦しげに歪ませる。

「御身が大切なのです。

この場所と首都では遠すぎて、通う事も儘なりません」

リカルドが首都に戻った後も私と接点を持つとしていた事に驚く。しかし考えてみれば、自ら呪術を施すほど私に執着していたのだ。

私が思っていたように簡単に関係を断ち切る筈が無い。

遅ればせながらそこまで考えが及んで反省する。

リカルドは悲痛な表情で、相変わらず私を一心に見つめていた。

美しいものが悲しみを表現すると、どうしてこつても罪悪感に満ちるのだろう。

結局無理矢理負わされたとはいえ主としての責任感と、美丈夫の迫力に負けてしまった。

「・・・分かりました。行きましょう」

諦めて首を立てに振つた私に、リカルドは笑みを向けた。

「感謝致します。ハルカ様」

どつちやらまだ縁は切れないらしい。

第七話

規則的な振動に揺さぶられ、私は窓の外を見た。

ゆっくりと風景が後ろに流れると、反対側から新たな代わり映えのしない森が横切っていく。

馬車の内装は華美すぎない雅にあふれ、乗り心地からも庶民が稀に用いるものとは一線を画していた。

一生乗る機会など無いと思っていたが、何があるか分からないものである。

そして座る私の斜め前には、リカルドが優雅に座っていた。

「お疲れになりましたか？」

「いえ、大丈夫です」

「屋敷も近くなりました。後少しの辛抱です」

もう長いこと乗っているのです、そろそろ辛くなってきました。

あと少し、との言葉に希望を持つ。

宣言通り迎えに来たりカルドに連れられ、馬車に乗ったのは数日前の事。

彼が首都に帰ってから迎えに来るまで、暫くの時間が過ぎている。

その間に私は体を起き上がらせるまでに回復していた。

もつとも、歩くことはまだ出来ないが。

本当に自分が貴族の家に上がり込んでいいのだろうか。

未知の領域に足を踏み込む事への不安を抱え、それでも馬車は進み続ける。

「ああ、見えてきました」

指さしたその先を見る。

西洋絵画のように、大きな敷地が突如として現れた。

計算され整えられた緑の彩りに、威厳のある門が正面で訪問者を選別している。

門の前に馬車は止まり、家人らしき男性が門を開けた。

「お帰りなさいませ、リカルド様」

「ご苦労」

素っ気ない言い方だった。

いつも慇懃な態度の彼しか見ていなかった為、少し驚く。

「リカルド、お帰りなさいと言われたら、返す言葉は違つてしょう？」

リカルドは言われ慣れていないことを言われた、という様子だった。しかし直ぐに顔を緩め、家人に向かって言い直す。

「そうでしたね、申し訳ございません。

ただいま、グスター」

「いえ、・・・」

家人の人は恐縮したように身を縮めたが、顔には喜びの表情が浮かんでいた。

そんなに普段無愛想なのだろうか。想像出来ない。

馬車は敷地内を進み、屋敷の前で止まる。

窓から大きなその建物を見上げていた私に、リカルドがそつと肩に手を置いた。

「さあ、参りましょう」

足と腰の下に手を回し、だき抱えられた。

不安定な上半身を支えるために、腕を彼の首に回して力を込める。

少女の憧れであるはずのそれは、少年の姿であれば只の運搬法に過ぎなかった。

馬車から下りると、使用人の服装をした人達が揃ってリカルドを出迎えていた。

「お帰りなさいませ、リカルド様。

ようこそいらつしやいましたハルカ様」

年輩の執事だろうか、男性に合わせ他の家人も一斉に頭を下げる。

初めてされた歓迎の仕方に動転する私を余所に、リカルドは慣れたように彼らに返した。

「ただいま。」

留守をよく守ってくれた」

全く別世界である。矢張り、来たのは過ちだったのではなからうか。しかし今更逃げ出せる筈もなく、私を抱える人は悠々と屋敷の中へ足を進める。

「ハルカ様も長旅でお疲れでしょう。部屋へ案内いたします」

「・・・お願いします」

大きな肖像画を過ぎ、高そうな調度品が並ぶ廊下を抜ける。

光を反射する床は毎日家人が磨きあげているのだらうか。

天井には複雑な紋様が描かれ、重量のある燭台が壁に飾られている。私はそれ以上家の内装について考えることを止め、此処は高級ホテルだと自分を誤魔化した。

個人の資産であるなど、私の理解出来る範囲を越えている。

器用に私を抱えたままりカルドが木製の扉の一つを開く。

その向こうに現れたのは、初めて自分の目で見る天蓋付きの大きなベッドだった。

「凄い・・・」

中心にあるベッドだけではない。周りの家具もアンティーク調の品の良いものばかりである。

素直な感嘆が唇から漏れ、リカルドは満足そうに笑みを深めた。

「此処がハルカ様のお部屋でございます。」

私の部屋と近く、何かあれば直ぐに駆けつけられるかと」

つまり、わざわざこの一室を私の為に開けたのではないだらうか。

ベッドに降ろされると、雲のように柔らかな感触が背中に触れた。

「喉が乾きませんか？飲み物でも持って参りましょう」

布団を私の上にかけると、リカルドは私に背を向け出て行った。

一人残された部屋で落ち着かない気分のまま、視線をさ迷わせる。

本当に何もかも信じられない。

今自分が貴族の屋敷に客人として迎えられているなど。

この世界に来てからも随分たつ。

手は輝、頬は瘦け、夢見る時分はとうに過ぎた。
寧ろ、その生活の中に喜びと安寧を見いだしたというのに。
唇を引き締める。

忘れないようにしよう。何時いかなる時も。

私の望みは、体を回復し師と暮らした家に帰ること。

これさえ叶えば良い。それ以上は望んではならない。此処の暮らしを当然と思つてはならない。

夢のような待遇だからこそ、自らを引き締めた。

一瞬で平穩が崩される現実を、嫌と言うほど体験したから。

「失礼します」

手に小さな盆を持ち、リカルドが再び入室して来た。

「お持ちいたしました。どうぞ」

何かの赤い果汁とおぼしき飲み物を差し出され、受け取る。

「ありがとうございます」

口付けてみたら、甘く美味しかった。

「庭でこの季節に成る果実です。後々庭にもご案内いたしましょう」

「是非。どんな実なのか気になります」

「畏まりました」

穏やかな雰囲気と和み二人が黙ると、耳に入るのは風に揺れる木々の音だけになった。

家人の声も遠くに聞こえるばかり。

「ところで、ご家族の方は一緒にお暮らしではないのですか？」

「・・・中心地に本邸がありまして、両親と兄はそちらで暮らしています」

表情は変わらなかったが、リカルドは返答までに僅かな沈黙を挟んで答えた。

彼だけがこの広い屋敷で生活を送っているには、訳があるのだろうか。

疑問に思っていたのが顔に出ていたらしい。

リカルドは苦笑し、渋らずにさらりとその理由を教えてくれた。

「昔は此処が本邸として使われた事もあるそうですが・・・今は首都の重心が東寄りに偏っております。」

それ故、より利便性のある場所へ本邸を移したのです。

とは言え人が全く住まなくては、家は荒れるばかりですから。

私が管理を怠らない条件付きで権利を父より譲渡されました」

「そうだったんですか」

こんな広ければ家を維持するのも大変そうだ。

「私は静かな場所の方が落ち着くので、この家なら気に入らそうです」

屋敷の周りはまだ自然に近く接している。

人の多い通りに囲まれた場所よりも、森暮らしの私には合っている気がした。

一時の安らぎを得るには、これ以上の場所はない。

長く馬車に揺られた疲れもあり、やってきた微睡みに身を委ねた。

第八話

リカルドの屋敷に来たものの、肝心のこの屋敷の主には予想よりもずっと会う時間が短かった。

朝は食堂まで車椅子で私を運び朝食を共にするのだが、終われば慌ただしく仕事に行ってしまう。

すると次に会うのは、普段なら既に私が眠っている時間に帰宅するリカルドを迎える時だ。

家人も主人の帰りまで眠らず待っているし、招かれた身であるので私も彼が帰るまでは起きている事になっている。

寝てて良いと言いながらも、喜ぶリカルドの顔を見るのが最近の日課となっていた。

昼間は体を動かし、筋肉を付けることに終始している。

今のところ、順調に体は回復し近々立つぐらいなら出来そうだった。ただ不安な事もある。

見えない後遺症が残っていないかと、魔力の回復の事だ。

あれ以来全く魔力を行使していない。

感覚的には徐々に戻っているのだが、医師の許可は下りず確認には至らない。

もし極端に少なくなっていれば、魔術師としての今後に関わる。

そう思うと恐怖が襲った。

「ハルカ様。今日はどうなされますか？」

朝食から私の部屋に、車椅子を押してきた男が聞いてきた。

焦げ茶色の髪をした彼はアルフという、使用人である。

常に屋敷にいられないリカルドの代わりに、私の世話役を任された人物であった。

今まで個人に仕えた経験が無いらしく不慣れな様子も見受けられるが、人の良さそうな顔と親しみやすい事から私は好ましく感じていた。

「そうですね・・・庭でも行きましようか。
アズリの花がそろそろ咲く季節ですから」
「畏まりました」

アーチを潜ると、丁寧に手を加えられた庭園が広がっていた。
絵画的な美しさの中に、アズリと呼ばれる赤い花が大輪を咲かせている。

アルフが静かに車椅子を引いてくれるので、穏やかな気持ちで小鳥のさえずる庭を探索した。

その途中で、石畳の小道から外れる大きな木が目映る。

日差しを遮り、風に揺れる木陰はとても涼やかだ。

無性にその下で涼みたい気持ちが沸き起こった。

「あの下に寄せて下さい」

「はい」

下草の中を車椅子が進み、木陰に入る。

木の直ぐ脇で止まったところで、私は木に触れた。

十分なしなやかさで、少しぐらいの体重をかけた所で痛んだりはないと思われる。

「一人で、立てるか・・・試して見ましようか」

「お一人ですか？」

「転びそうになったら、助けて下さい」

そう言つて、足に力を込めた。

アルフが心配げに直ぐに受け止められる体制で見守っている。

木を支えに、腰を浮かせる。

後少して立てそうになったが、立ち上がりきることが出来ず、下草に倒れ込みそうになった。

「っ、」

アルフが巧みに私の体を支えて、それを阻止してくれた。もう少し遅ければ地面に体を打ちつけていただろう。

あと少しだったのに。実に惜しい。

思わず残念だと首を横に振る。

アルフは先に立ち上がると、私に向かって手を差し出した。

「大丈夫ですか？」

「お陰様で。有り難う御座います」

手を取って体を支えてもらう時、触れた拍子にふとした違和感が胸をよぎる。

けれど、それは明確な形を持つ前に過ぎ去ってしまった。

車椅子に私を戻したアルフは困ったように眉を寄せ、私の様子を伺いながら言った。

「ハル力様。私のような使用人に、礼は不要です」

「いけませんか？」

体に馴染んだ、嘗ての世界で身に付いた習慣の一つであった。

「・・・私達は報酬の対価として、仕事をしているのです。」

「必要、不必要の問題ではなく、只私が言いたいのです」

慣れていない事をさせて申し訳ない。

その意味で苦笑を浮かべてアルフの顔を見れば、諦めた表情を浮かべていた。

「畏まりました」

恐らく変わった人間だと思われている事だろう。

たかが習慣、されど習慣。

不審に思われないよう、他の点では適度な妥協も必要かもしれない。

庭園は静かに私達を迎えている。

庭師以外の者が余り立ち寄らないらしく、誰も通らない。

この場所の本来の主が庭園に来るのを、私は見たことがなかった。

「リカルドとは最近・・・会いませんね。」

お仕事が忙しいのでしょうか」

「きつとそうでしょう。優秀な方ですから。」

彼方此方で呼び出されて居るのでは」

見た目通りにリカルドは秀でてているのか。

天は二物も三物も与える人には与えるものだ。

あの容姿なら、中身が伴っていないくともそれはそれで愛嬌があるのかも知れないが。

「何かりカルドについて教えて頂けませんか？」

この様にお招き頂いている身でありながら、実の所余り良く知らないのです」

「・・・それならば、他の者が宜しいかと。

私はまだ日が浅いもので」

「では、誰か捕まえて今度聞いてみますね」

いつも部屋で世話をしてくれる女中さんに聞いてみよう。

静かな庭園の中で、頭から離れない問いを思う。

リカルドは何故私に主従を申し入れたのだろう。

本人に問わなければならぬと常々思っているが、口にし辛くいつも言えぬまま別れていた。

彼が私の何か幻想を追って身を委ねたのなら、双方にとって悲劇である。

生意気なあの賭から会うまで時間を置いたのなら、冷静になる余裕はあった筈だ。

私に全てを投げ出したくなる状況に彼はあったのだろうか。

だとしたら、余りに哀れで悲しい事だと思う。

空が暗く陰り、遠くに黒い雲が見えた。

「風が出てきましたね。中に戻りましょう」

アルフの声に頷いた。

第九話

「リカルド様の事、・・・ですか？」

お茶を注いでいた手を止め、少し驚いたようにメイドさんは言った。ファレリーというまだ若い女性だ。年も近く、一番話しかけやすい雰囲気を持っている。

「ええ。顔を合わせるのも朝と夜の少しだけですし。

余りリカルドの事を知らないのです」

「まあ。そうでしたか」

アルフが私の車椅子を押して、お茶の置かれたテーブルに寄せた。ファレリーさんがお茶を私の前に静かに置く。

彼女は首を傾げ、少し考えてから話してくれた。

「そうですね・・・一言で申しますと、お変わりになりました」
出されたお茶は随分高級な味がする。

高級すぎて舌が慣れていないのだが、此処に来てから表には出せないでいる。

それを飲みながら、ファレリーさんの続きを促した。

「前は今のような方では無かったと」

「私はこちらでお世話になりだしたのは5年前になります。

その頃は、顔に表情をお作りになる所を見たことがあります。た。

騎士寮で暮らされていたので、こちらの家に帰る事も殆ど御座いませんでしたし」

意外だった。私の前では何時も微笑み、時に悲しみの表情を浮かべていた。

だからすっかり彼は社交的な人間だと思っていたのだが、昔からという訳でも無いようである。

「ご招待なさるご友人も手紙を交わす恋人もおらず、恐れながら私どもはご主人様は人嫌いなのだと認識しておりましたわ」

「友人も、ですか。徹底してますね」

「はい。あの容姿ですし、興味を持たれる方はいらっしやっただけですが……」

それらの全てを上手にあしらって、一定以上の距離を保たれているようにお見受けしました」

なんだか、本当に別の人を聞いているようだ。

いつも天使の笑みを浮かべ、人を気遣い、優しいあの人と同人物とは思えない。

「一体、何がきっかけだったのでしょうか」

「それはご主人様しか分からない事ですわ。」

とにかく、お変わりになられたのは確かです。

よくお屋敷にお帰りになられますし、よくお笑いになり、人との交流も増やされました。

私達は喜ばしく思います」

それは使用人としても誇らしいだろう。

見目麗しく、激戦区から生還した武勲もあり、さらに社交性まで身につけたのだから。

神から愛された才能が揃いすぎて、同じ人とは思えない。

「色々と教えてくださって有り難う御座います」

「何かまたご質問があれば、何なりとおっしゃって下さい」

フレリーさんは飲み終わったお茶の容器を持って退室した。

空気のように静かに佇むアルフさんと二人になり、人目も気にせず私は混乱した頭をかく。

リカルドの人となりを知ろうとしてかえって疑問が増えてしまった。人嫌いだった人間が、急に社交的になれるだろうか。

あの容姿だから十分に話題は尽きないにしても、内面までは変えられない。

良い人で終わらせるには腹に一物もってそうだ。

これまで通り相手の出方を見るしかないだろう。

礼儀には礼儀を返し、心の何処かで常に疑う視線も忘れない。

これを続ければ良いだけである。

今日の夕食は昼間の話が頭をよぎり、リカルドの目を盗んでは彼の様子を伺ってしまった。

時々視線がかち合うとあの華やかな笑みで「どうされました」と聞いてくるので、私は何でもありませんと小さく返す。

おそらく視線には気づいているだろうに、深く追求してこない。良い人だと思った。

そうこうしている間に夕食も食べ終わってしまった。

この後普段はそれぞれ自室に戻るのだが、今日はリカルドが私に向かって話しかけてきた。

「ハルカ様。何か不自由などは御座いますか？」

「何も。皆様に良くして頂いてます」

「遠慮なさらずに。望みのものがあるならば、お応えします」

「本当に無いのですよ。」

敢えて言うならば、そろそろ自宅が気にかかる程度です。

きつと荒れ放題でしょうから」

「家に帰りたいのですか？望みはそれだけだと」

最後の言葉だけ驚くほど冷たい響きだった。

思わず彼の顔を注視してしまうと、リカルドは静かな表情でこちらを見ている。

これは答え方次第で、私か彼の何かが変わってしまう。そんな気さえした。

そういった質問は、誤魔化してはいけない。

自分を華美に見せようとしても、後々暴露するだけである。

「あらゆる望みを叶えて頂いた所で、自分の能力が見合っていないのならば行く先は推してしるべし。」

私は、村の魔術師の器ですよ」

苦笑いして答えると、リカルドは片眉を上げた。

「本当でしょうか。私にはもっと大きな器に見える」

なんて事を言うのだろう！

私は、突拍子もない発言に思わず口を開けて大笑いしてしまった。

「ははは！この私が、貴方に言われるような器ですか！
買いかぶりですよ。何より私には野心がない」

野心とは力だ。しかし、私が持つのは臆病者の心だけである。
鼠を見て虎の子と見間違えるとは、リカルドも見る目がない。
笑う私を只じっと見つめるだけの男に苦笑しながら告げる。

「村の中で、誰かの役に立てるだけの力があればいい。

そう思ってしまう私には大事は向きません」

リカルドは黙ると何事か考えているようだった。

「今は、体も満足に動きませんしね」

「・・・そうですか」

一体その頭の中で何を考えているのだろうか。

頭の良い人間の思考など、凡人の私には理解できない。

呪術により主従関係が成り立っている以上、強制的に言わせる事は
可能だった。

しかしそれは卑怯な事だろう。

心を覗く事は、最も相手を軽視する行為だ。

絶対に行わないと断言はしないが、今は少なくともその時ではない。
語ってくれる時を待つか、このまま離れるか。体が回復した後の事
である。

そろそろ夜も遅い。部屋に戻ろうと、アルフを側に呼んだ。

「ああ、最後に一つだけ。

明日から帰って来れない日が多くなりそうです。

私に構わず先にお休みになって下さい」

「分かりました」

それは、私と距離をおきたいと言っているように聞こえた。

第十話

リカルドと顔を合わせなくなってから何日経ったか。

あの言葉はやはり決別の宣言だったのだろう。

日にちに全く囚われない生活をしている内に、私はすっかり日にちの感覚というものを失ってしまった。

村に居る間は、毎週毎に誰々の所に納品しなければならぬ物があったり用事があったりとこれでもせわしない生活をしてきた。

それが今や無職同然の病人生活。養われている身で言うのも悪いが慣れない。

体が着実に回復している事が唯一の救いだ。

近頃ようやく自力で立ち上げられるようになった。ゆっくりとなら歩けもする。

部屋にある椅子に腰掛け、用意してもらった魔術書に目を通していく。

この世界では印刷技術が無いため本一冊がとても高価で、しかも魔術の専門書ともなれば出回る事は滅多になく庶民には手が出せない。そんな高級品を惜しげもなく貸してくれるのだから、やっぱり貴族の懐というものは凄まじい。

目で読み込みながら必要な部分を白紙の紙に万年筆で書き写していく。

折角の好環境なのだから出来る限り知識を持ち帰ろう。

その一心で筆を走らせていた。元々このような地味な作業は好きである。

一人で黙々と作業を続けていると、扉を叩く音が控えめに響いた。

「どうぞ」

許可を出すとアルフが無骨な一礼をして部屋に入って来た。

誰も見ていないのだから、いちいち私如きに丁寧な礼などしなくて良いのに。生真面目な事だ。

彼は手にしていた一枚の厚手の布を私の肩にかけた。

「もう随分と長い間机に向かわれています。」

少し休まれてはいかがですか」

言われて初めて時計を見る。針は私が予想していたよりもかなり先に進んでいた。

「本当ですね、気づきませんでした。」

きりの良い所まで読んだら休みます」

「では軽食をお持ちいたします」

病み上がりという事もあり体調を気にかけてくれたのだろう。

間接がぎこちない以外は特に問題も無いから、その好意が少しばかり煩わしい。勿論口には出さず、全てを受け入れているが。

もし私の体調が崩れた場合責任を問われてしまうのはアルフだろう。そう思うと無碍に断ることも出来ない。

戦場では何日も野ざらしで生活する事も多かったから、本当にこの待遇は慣れないものだ。

アルフは一旦扉の外に行き、洋菓子と温かな紅茶を用意してくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

差し出されたそれらで体を温めながら外を見る。

いつも散歩している庭は相変わらず美しいが、毎日足しげく通っていると植物に興味の薄い私は流石に飽きた。

折角外れとはいえ首都に住んでいるのだから、一度は中心地に行ってみようか。

壁際で立っているアルフに声をかける。

「一度、町に行ってみたいです。体も戻ってきた事ですし。」

ご一緒に頂けませんか？」

私は気軽な気持ちで提案した。

アルフがいつものように直ぐに同意してくれると思ったからだ。

彼が断る所を、会ってから今まで見たことも無かった。

けれど帰ってきたのは予想もしていなかった硬い声だった。

「受け入れられません」

はつきりとした声に、心臓の鼓動が一瞬乱れた。

アルフはいつもの人好きのする表情ではあるものの、何度頼んでも断られる事を相手に悟らせるだけの雰囲気を持っていた。

普段の彼からは離れた不釣り合いな様子に戸惑ってしまった。

アルフはそんな私を見て罰が悪い顔をし、誤魔化すように言葉を続けた。

「町は今人で溢れて治安が悪いのです。

戦地から引き上げた人が、職を求めて集まっています。

そんな場所に体の悪いハルカ様をお連れすることは出来ません」

「でも、リカルドのような騎士がいるのでしょうか？」

「リカルド様は対応に追われている所でしょう。人が集まれば問題が起きます。

けれどそれを根本的に解決するのは武では無く政の役目です。

政には時間がかかる」

そんなに治安が悪いのだろうか。

私は運の良いことに大した問題も起こらない田舎に今まで暮らしていた。

体験したことの無いものには興味が湧く。止められる程危険な状態なら、かえって見たい思いが強くなった。

今は体調が芳しくないが魔力なら感覚的に大分戻ってきているのが分かる。

魔術師は一般人から恐れられている。

例えば体が上手く動かないからといって、術の一つでも見せれば大概問題は収まるだろう。

その自信から私はアルフの忠告を重要視しなかった。

けれど正面から行っても止められる事は分かっている。

「分かりました」

だから表面上だけで納得した振りをする。内心は別であったとしても。

この少年の姿故にどうも甘く見られているようだが、これでも中身は成人した大人なのだ。

ただ聞くだけの素直さは持ち合わせていない。

アルフは頷いた私に安心したようだ。

「申し訳ございません」

深々と慇懃な態度で謝罪する彼を冷めた気持ちで見た。

リカルドは屋敷にも戻らず私の事をもう気にしていない。

傍に常にいるアルフは私を幼子と思っているようだ。

・・・ならば、勝手に行くだけである。

若干の諦めを胸に抱き声に出さず呟いた。

扉を叩き、中にお方の返事を待つ。

「・・・ハルカ様？」

普段ならば直ぐ返ってくるはずの声が聞こえない。

不安が冷や汗と共に背中から噴き出した。嫌な予感がする。

今度は強めに扉を叩く。

しかし半ば予想した通り、中から返ってくるのは静寂だけだった。

「失礼します！」

慌てて扉を大きく開け放つ。

小柄な姿は椅子の上にも寝台の上にも見あたらない。

なんという事だ！

焦燥と気づけなかつた自らの愚かさが胸を苛む。

一縷の望みかけて部屋の中に急いで入り、部屋の中を見回す。

だが残念ながら寝台の影に倒れているということも無かった。

頭を抱えたい思いを胸に、それでも何か残されていないか探してみる。

机の上に一枚の白い紙が不自然に置かれているのが目に入った。

急いでその紙に記された文字を読む。

「ああ・・・」

アルフは思わず溜息を吐いて目を覆った。
紙には一人で町に出かけるから案ずるなど、
気楽な口調で書かれていた。

第十一話*

王城の一角にある長い廊下を、颯爽と歩く同輩の姿を見かけた。肩で風を切る様は忙ししないと全身で主張している。

けれども最近常にその状態である事を知っているので、俺は敢えて声をかけた。

「やあ、リカルド」

「・・・グラハムか」

歩む速度を落としたリカルドの隣に並んで俺も歩く。

少し疲れた声で尋ねられた。

「何用だ」

「君の変化が少し気になってね。」

回りくどい事は嫌いだ。何があつたんだ？」

戦地から帰って来てもう随分経った。

俺は首都の警護だったが、彼の行った前線では相当な激戦を強いられたようだ。

帰えれなかった人も多い。相当過酷な状況だったの筈だ。

だからだろうか、今までのリカルドとは違った行動が度々見受けられるようになった。

仕事以外でも積極的に人と会うようになり、その目立つ容姿を上手く利用した人付き合いをするようになった。

知る人は少ないが、人嫌いだと俺は知っている。

そして人嫌いな彼にとってその変化は劇的である。

社交性を身につけたと一言で言ってしまうが、俺はもっとその行動に意味があるように感じてならなかった。

野心のような強い感情を。

「何を聞いてくるかと思えばそんな事か。」

誰でも自分を正すという機会はあるだろうに」

「ほら、それだ」

俺はリカルドのその言葉の揚げ足をとって突きつけた。

「昔の君なら『お前に言つて何の得がある』って一蹴していただろう」

「だから何だ」

「その理由が知りたい」

舌打ちをするような苦々しい表情と共に睨みつけられる。

今の顔ですら、昔は見たことが無かったと本人は気づいているのだろうか。

最初にリカルドを見たのは、自分達が騎士を目指し従騎士として働いていた時の事である。

凜とした立ち姿に引き締まった目元。全体的には冷ややかな印象を受ける少年だった。

その時から目を引く容姿は顕在で、妬まれる一方で多くの人が魅了された。

当時の俺もその一員である。

貴族的な容姿と、一段上から見下ろすようなその視線に憧憬の感情を抱いた。

大部分は彼と友人になったと錯覚し、そのまま終わる。

けれどある線を越えて近づいた者は程なくして気づくのだ。

彼は誰にも心を許さない。霞むように消えゆく人間だと。

後ろ盾は弱かったが、その負を上回る才能があった。

しかし剣の腕も判断能力も洞察力も人を見抜く目もあるくせに、一向にそれを活用する気がない。

いや、活用する事を周りから望まれなかった。

彼が平民ならばそれでも平穩に暮らせただろうが、上流階級社会では潰れるだけである。

美しいだけの命のない絵画のようであるとも思った。

それがどうだ。あの無気力ぶりはまるで見えない。

枯れかけの花が水を得たかの如く、強かな生命力に満ち溢れている。

「死を間近に感じれば、誰しも心境の変化がある。」

そういうものだろうか？」

「真実とも嘘ともとれない言い回しだった。」

だが勘を信じるならば、肝心な部分は全く触れていないだろう。リカルドは実のない口角を上げただけの笑みを作る。

無意識の内に呻いた声が出てしまい、自分の敗北を感じた。

俺は昔から、彼の笑みにはそれが何を意味しようとも弱いのだ。耽美主義によるものでは無い。

理想の存在に対する絶対的な気後れだった。

リカルドもこれ以上何を言っても答えてくれないだろう。

今日の所はこれで引き下がるか。

そう思った時だった。

「リカルド様！」

隣の男の名前を誰かが呼んだ。

声の方向を見やれば顔色も悪く走り込んでくる一人の男がいた。

「グスターか、どうした？」

どうやらリカルドの使用人らしい。

グスターと呼ばれたその男は傍まで来て立ち止まり、荒い息もそのままにリカルドに何やら耳打ちする。

余程急ぎの事があったのだろう。

隣に立つ俺に挨拶すら無いのだから、彼の焦り具合が伺える。

家族の訃報でもあったのかと色々憶測してしまう。

そして、俺は目を疑った。

リカルドが酷く動揺した表情だったからだ。

不安気に目をさまよわせ、元々白かった肌が青くすら見えた。

俺は今までこの男がこんな感情を露わにした所を想像すらしなかった。

全てを諦め、全てに絶望していた筈でからかけ離れた姿だった。

「あれは何をしていた？」

「部屋の傍に控えていたらしいのですが・・・」

「どうも」

「分かりません」

微かに漏れ聞こえる会話から誰かの行方が分からなくなったと知る。

「・・・お捜ししなくては」

それは焦燥の籠もった小さな一言だったが確かに聞こえた。

問題の人物こそ、リカルドを変えた張本人だと直感が告げる。根拠は無い。

「直ぐ行く」

走りだそうとしたりリカルドに声をかけた。

「人捜しなら、俺も手伝おうか？」

一瞬彼は躊躇ったが、結局その首を横に振った。

「いや、必要ない」

そしてそのまま振り返ることもせず走り去る。

置いて行かれた使用人が慌てて後を追った。

嵐が去った後の静けさが周囲に戻り、一人残された俺は失望の溜息を吐く。

「俺、信用ないな」

人手が必要な人捜しで手伝いを断られたというのは、そういう事だろう。

君を変えた人が知りたい。それは害をなす為ではなくただ見守りたいが故なのに。

リカルド。今も昔も君が好ましく思う。本人は信じてはくれないだろうが。

時折見せる澄んだ水面のような透明な心を、何より自分は眩しく思っている。

一方的な友愛を胸に、深く嘆いた。

第十二話

「本当に大丈夫か？坊主」

綱で馬を引き留めながら、御者の親切なおじさんが私に言うてくれる。

馬が引く荷馬車の中には取れたての新鮮な野菜が載っていた。

「はい、後は道も分かります」

足に力が入りきらず不自然な歩き方の私を、道端でこのおじさんが町まで乗せてきてくれたのだ。

理由を訪ねられ、病気の母に薬を買うためと偽ったのもとつさに良い言い訳が思い浮かばなかったからだだった。

同情して薬屋まで運んでくれようとするのだが、私の目的はそれではないので遠慮を装って断る。

「そうか、氣いつけるよ」

「ありがとうございます」

石畳で作られた大通りの道を去っていくおじさんの後ろ姿を、手を振って見送った。

完全に人混みの中に見えなくなつてから手を下げる。

心は久々の外出に浮き立っていた。

手元には私物として手放さなかつた幾らかの現金を持って来ている。戦の報酬として貰った分は流石に多いので、屋敷へと置いてきていた。

何処から見て回ろうか。首都ならばきつと田舎では手に入らない本や、魔術道具、薬草等が取り揃えてあるに違いない。

これでは一日で回りきれるか分からないな。

まだだるさの残る体を歩かせながらそのような事を考えていた。

一先ず本屋を回る事に決め、人に訪ねながら数件訪れてみる。

その最中、確かにアルフに聞いていた通り人々の争う声が聞こえたり、見るからに堅気ではない輩がいたり治安の悪さを実感した。

その辺りは近寄らなければ問題ない。

流石流通の中心地だけあり、かねてより欲しかった本が何冊か見つける事が出来た。

しかし此処で本を買ってしまつと他の物が買えなくなるので、見るだけに留めて魔術道具店を探す事にする。

魔術というのはどうも陰の気配を好むのか、魔術的に立地の良い場所というのは大概は大通りから離れた場所である。

そのため、殆どの魔術関連店は素人目には分からない奥まった場所に存在する事が多い。

一応ある程度の規則を知っていれば店を発見することは出来るようになってきている。

それを探して人通りの少ない道を歩いていた。

道は狭まり不規則な両側の壁が死角を多く作り出す。その道で見つけた魔術師用の印を一つ二つと辿つて歩いた。

直ぐに陰に連れ込まれてしまいそうな場所だ。此処は子供や女性は一人では歩けないだろう。

そう思った矢先、脇道の陰から言い争う声が聞こえてきた。

「いいかげんにして！私は嫌だつて言つてるでしょ！！」

「お高くとまりやがって。」

「こっちが下出にでりゃ、つけ上がるなよ！」

どうやら男女の声のようだ。声の主から見えない位置で、足を止める。

痴話喧嘩だつたら巻き込まれるのも損である。

ようやく叶つた外出で買い物を楽しみたい気持ちはある。

しかし、このまま進んで面倒になるのも避けたい。

迷っている内に、言い争う二人の声は加熱していつていた。

「あんたなんか、眼中にないんだから！このブ男！」

「この・・・！」

男が頭に血を上らせたのが見えずとも分かる。

見過ごす事も出来ず、慌てて声のする道に飛び込んだ。

庶民らしい簡素な格好の若い女性と粗野で粗暴そうな壮年の男が見える。

男は腕を振りかざして女性を威嚇し、今にもそれを下ろしてしまいたいそうだった。

「すみません」

二人に声をかけてこちらに注意を引かせた。二人の怒りの視線が集中する。

たじろぎそうになるのを抑え、背を伸ばして抗議した。

「事情は知りませんが、こんな往来でそのように叫ばれては皆が怯えてしまいます。」

どうか冷静になって話し合いになられたらどうですか」

女性は正気に返って決まりが悪い顔をしたが、男はそれどころかますます激昂した。

顔を真っ赤にして今度は私に矛先を向ける。

「餓鬼が生意気言うんじゃねえ！子供はひっこんでろ！！」

この容姿では舐められるのも覚悟していた。

しかし、大男にでも化けてから出れば良かったと後悔した。

荒事には見せかけというものも時に必要である。

「子供でも思わず口を出したくなる騒々しさだったんですよ。」

貴方の方こそ、いい大人なのですから外聞というものを気になさったらどうですか」

「この野郎・・・餓鬼は大人の言うことを素直に聞けばいいんだよ！」

「ゾイ、あんたも大人げない。この子の言う通りよ。」

さっさと家に帰って」

女性からも冷静に諭され、それでもゾイと呼ばれた男は収まらなかつた。

引き時も分からずに女性に向かって八つ当たる。

「元はといえば、手前のせいだろ！」

男が胸ぐらを掴もうとするのを女性が必死に逃げる。

爆弾が弾けそうな気配がしたので、仕方なく私は魔術を使って右手に電気の塊を出現させた。

透明の魔力の球体の中で放電され、派手な音と光で飛び回っている。実用性よりも派手さを追求した脅しの為の魔術である。

「ゾイさん、・・・でしたか。」

その女性から離れてさっさと逃げる事をお勧めします。

痛い目に合いたくないのでしたら」

二人は動きを止めてこちらを見た。

一般市民にとって、魔術師というものは畏敬をもって接する存在だ。数が少なく触れる機会も少ないが、時に通常ではどうしようもない問題を解決してくれる。

そして、並の剣士より並の魔術師の方が圧倒的に強い。

男は真つ赤だった顔を真つ青に染め変えた。

捨て台詞も吐かず、一目散に逃げ出した。

「もう二度とうちの店に来るな！」

女性がその背に向かって叫んだ。きつとこの距離なら届いただろう。

私は男の姿が完全に見えなくなってから電気球を消した。

彼女はしっかりと私に向かってお礼を言った。

「あの・・・ありがとうございます。」

私の父が飲み屋をしてまして、そこで目を付けられて困っていたんです」

「そうでしたか」

道理であの恐喝にも立ち向かえていた訳だ。

このような状況にも慣れているのだろう。並の女性なら泣いている。

「驚きました。お若くみえますが魔術師さんだったんですね。」

お礼がしたいので是非お店に寄ってもらえませんか。

お酒でなくとも、料理もあります」

「いえ、お気になさらず」

寄りたい店もあることだし、足早にその場を立ち去ろうとした。

しかし数十歩歩いた所で急に気分が悪くなる。

「・・・、！」

ぐらぐらと視界が揺れ、口元を押さえてうずくまった。

どうした事だろう。久々に魔術を使ったからかも知れない。

屋敷を抜け出す時に少し使ったのを除けば、あの爆発以来である。

「大丈夫ですか？」

「・・・お店で良ければ休むところを作りますよ？」

後ろから追ってくれた女性がそう提案してくれたので、その言葉に甘える事にした。

第十三話

顔の上半分にかけられた冷水で絞った布が不快さを拭ってくれる。椅子を並べて作ってもらった台の上で、私は横になっていた。

目では何も見えない代わりに、耳からは酒気を帯びた飲み屋の音が大きく聞こえた。

「マリ、災難だったなあ」

「全くだわ！」

最近視線が気持ち悪かったから、気をつけていたんだけど」

「ゾイの野郎も馬鹿やったもんだ。今度という今度は見逃せねえ」

「見かけたら仇を取ってやるよ」

「もう良いわ、バシユールさん。魔術師さんに助けてもらったから」

常連客と助けた彼女との会話に耳を傾けていると、話の矛先がこちらに向かってきた。

「どうやら彼女はマリという名前らしい。」

「魔術師さん！俺達の看板娘をありがとうよ！」

「小さいのに凄いなあ、あんた」

顔にかけられていた布を取り視線を向ければ、酒に酔った人の良さそうな人達の顔が見える。

小さい店ながらも地元の人に愛されている様子から、不思議と懐かしい雰囲気を感じた。

「いえいえ、それほどの事でも」

つい癖で謙遜してしまうと、マリさんのお父さんである強面な店の主人が静かに否定した。

「でもあんたのお陰でマリは何とも無かった。すまないね。」

本当なら酒の一杯でも奢ってやる所だ。

しかし、その体調だと余計に悪化させちゃうなあ。」

「・・・では今度、何かまた美味しいものでも食べに来ますから。その時にお願いします」

「はは、すっかりしてる。・・・分かった。その時には鱧腹食わせてやるさ」

「此処の親父がそんな事言うなんて珍しい。

魔術師さん、いつもこうだって勘違いしちゃいけないぜ」

「なんだと？おい、今度からお前さんだけ割り増し料金だ」

「そりゃひどい！」

会話が自然と逸れていったので、私はまた布を顔にかけ直し視界を閉ざした。まだまだ体調は回復しない。

胃の辺りに残る気持ち悪さを堪え、気を紛らわせる為に耳だけ澄ませて周囲の会話を拾った。

何処の誰の息子が戦場から帰って来た、何の値段が上がって買い辛い、

町に増えた人のせいで問題が起こった、まだ、いつ隣国との緊張が高まるか分からない等々、日常の話をしているようでも皆があの戦いの事を気にしている事が伺えた。

けれど自国の軍が見事敵国を押し返し撤退させた事から、曇天の雰囲気を持ちつつもどこかしら明るさが存在している。

これからもつと良くなる。皆、そう信じていた。

従軍していた私は尚更この国の人々が希望を持てた事に心が温まった。戦った甲斐、とは違う気がするが自分の起こした結果が誰かの幸福に繋がる事は純粹に喜ばしい。

そのまま聞いていると、彼らの内の一人が馴染み深い単語を言った。「聞いたか？ヘダリオンの英雄の話」

「・・・ああ、そういえば隣の家の息子が言ってたな」

ヘダリオン樹海とは自分が戦っていた場所の名前である。しかし英雄とは勇ましい。

上官達の中には戦場において勇名を轟かす者も居たから彼らの中の一人に違いない。

「俺は知らん。誰だそれ」

「なんでもあのヘダリオン樹海での戦いで、敵兵を撫で斬りにした

猛者だと。噂じゃ、その人を恐れてヘリオットもこっちに手が出せなくなったらしい」

誰の事だろう。幾人か該当しそうな人間を思い浮かべるが、市井の人までも噂するほどではない。

戦いが収束して落ち着きを取り戻した今になって、無名だった人の業績が認められたのか。それとも単に私が知らなかっただけなのか。一人腕の立つ傭兵の噂を聞いたが、傭兵を英雄に祭り上げはしないだろう。

「撫で斬り？俺は魔術師で、空を真つ赤に染めあげたって聞いたぜ。敵兵の血と炎だよ」

「俺の聞いた話じゃ、大剣を持った大男だって聞いたぞ。魔法剣士として一万の屍の山を築いた大男」

「いやちよつと待て。戦術でヘリオットを翻弄した軍師じゃないのか」

随分と情報が錯綜していた。情報の伝達が人伝しか無いにしても、ここまでばらける事も早々無い。

余りにも意見が食い違つので、仕舞には彼らが互いにどちらが真実味があるか競いだした。

不思議なのは二人ほど戦地から帰ってきた人から直接聞いたという者が居たにも関わらず、その二人の意見も違っていたことだ。

結局彼らは何人もの「英雄」が存在し、誤って一人の人物だと広まってしまうのだらうと結論づけた。無難な考え方だと私も一人心中で同意する。

彼らの意見を興味深く聞いている間に、窓から覗く空が次第に陰っている事に気づく。

体も大分調子が良くなつたしそろそろ帰らなければ屋敷の方達に心配させてしまう。

私は椅子の台の上で体を起こし、顔にかけてもらっていた布を店の主人に返した。

「もう大丈夫なのかい？」

「ええ。暗くなってきましたので、お暇させてもらいます」

「そうか・・・俺はトマス。魔術師さんの名前を覚えてくれないか」
「そう言えば、名乗っていなかった。危うく名も告げずに去るところ
立ったと、今更ながら自己紹介する。」

「私は遥と申します」

「ハルカさん。また店に来てくれよ」

「是非」

「ハルカさん、またな！」

「ええ」

私はトマスさんと常連客のみなさんに軽く頭を下げた。扉のベルを
鳴らし外へ出る。

気持ちの良い店だったのでまた機会があれば遊びに来よう。

そんなことを考えながら、冷えてきた夕方の町へ一人歩きだした。

「丁寧な少年だったな」

「ああ、親御さんの教育が良いんだろう」

ハルカが去っていった扉を眺めつつ、客達がそんな感想を述べる。

トマスは娘のマリの様子がおかしい事に気付いた。

盆を持ったまま視線を下に向けて考えに耽っている。

「おいマリ。どうした？」

「え？あ・・・ううん、何でもなし。きっと気のせいだから」

「ふーん？」

娘は一人で自己完結してしまっただけだったので、トマスもそれ以上追
求しなかった。

絶望的な我々を救ったのは、天地を舐める巨大な閃光。

群がる悉くを尽滅させた力は正しく驚異。

その後も力尽きるまで傷病者を治癒し続けた高潔な人物は

・・・たった一人の、少年のような魔術師だった。

マリは首を振って考え直した。あの戦地に関する話は何故か皆が色々な事を話す。

だからきくと、この前聞いたこれもそんな噂話の一つに過ぎないのだ。

ましてや、その人が目の前に現れるのはどれほど低い確率だろう。

あり得るはずがないと自分を納得させ、マリはその事について考えることを止めた。

第十四話

人気も少なくなつた大通りを一人歩く。長く続く石畳の道は自分の足音を冷たく響かせた。本当に急がないと日が暮れてしまう。

街灯のある町中はまだ歩けるが、屋敷の周辺は明かりに乏しい。

最悪真つ暗な道を歩く羽目になる。ここまで遅く帰るつもりでは無かつたのに、つい長居してしまった。

機械的に足を交互に動かしながら、帰宅した時の屋敷の人達の様子を想像した。

アルフは間違いなく心配しているだろう。私付きの使用人なのだから。

ファレリーさんは優しい女性だから、きつと普通に気にかけてくれると思う。

他にも屋敷で頻繁に顔を合わせる人は皆親切にしてくれるから、迷惑かけた分帰つたら謝ろう。

リカルドは・・・どうだろうか。

私は彼の事が本当に分からない。彼が私にあのような呪術を使った理由も分からなければ、彼の生い立ちがかけ離れすぎて彼自身もよく分からない。

どうして私を主としたのか、その強い感情は私が知るものとは違いすぎて理解できなかつた。

貴族社会で生きてきた人間は、外から見える部分が綺麗すぎて戸惑う。

その言葉は本心なのか社交辞令のような飾りでしかないのか。

中身の見方がよく分からないのだ。時間をかけて絆を作れば簡単に分かるようになるのかも知れない。

けれどリカルドは私よりも大事な事があるようで、それにかかりきりである。

それを非難するつもりは無いが、リカルドの事情があるのなら私の

事情もある。何故屋敷から快く出してくれないのだ。

アルフがそこまで明確に外出を拒絶したからには、必ず雇い主のリアルドから指示があったに違いない。

彼の都合ばかり押しつけられている気分になった。

確かにリアルドは私にとても良い治療環境を提供してくれたが、別に私はあの病院のままでも良かった事だし。

・・・いや、これではまるで拗ねた子供ではないか。

自分の行動と思考を省みて、唐突に恥ずかしくなった。

彼は十分に良くしてくれているし、私が彼を理解出来ない事は彼の非でない。

全ては私に自信が無い為なのだ。

彼にどう接して良いのか分からず、戸惑っているばかりで自分の本心を隠している。疑心暗鬼に陥っている。

これではかまって貰えず自分に注意を向けさせるために家出した、非行少年だった。

公平な視点で彼を評価しようと思っていたのに、無意識の内に自分は悪い方向にばかり目を向けている。

分からない人物に距離を置くことが悪いとは思わない。けれど一方的な予測だけで人を軽視するのはいけない事だ。

間違った憶測だけの態度で傷つけたら、取り返しがつかない事もある。

自分で思っていた以上に自分は今の状況に苛立っているらしい。

他人を思いやる余裕が持てない。その上、感情的な行動をしている。勝手に外に出れば、迷惑を被る人が必ずいると分かっていたのに。

一人で自分の未熟を恥じ入っていると、遠くから誰かが私の名前を大声で呼んだ。

「ハルカ様！」

甘く柔らかく何処か冷たく、いつまでも聞いていたいと思わせる風のようなその声が、今は切迫感に満ちた悲痛なものになっていた。

前方から私をめぐけて一直線に彼が駆け寄って来る。

「リカルド」

私は痛々しい表情に、思わず彼の名を呟いた。

彼はどれだけ走ったのか、滝のような汗を流していた。いつもの優美さとは程遠い。

息を切らせ格好も土に汚れた酷い有様で、わき目もふらず幼子のように私を視線で射抜く。

リカルドは私の正面に立つと、不安に満ちた目で私の全身を一瞥し私が怪我などしていない事を確かめる。

足も、胴体も、手も、傷一つ付いていない事を確認してから私の間抜けな表情を見た。

そして私の両手をリカルドの大きな手のひらで包み、祈りを捧げるように彼の額に近づけた。

「・・・ご無事で」

掠れる声で吐露したのは何処までも純粹な私を案ずる心。

私はその瞬間、ずっと疑問に思っていたリカルドの一部を氷解した。彼は、私に縋っている！

誰が想像するだろう。全てを持つように見えるこの人が、何も持たない私にそんな感情を持つなんて。

雛が親鳥に縋るように、彼は私を頼っている。

普段より小さく見えるリカルドの体を驚きの目で見た。

だとするならば、私の抱えていた疑惑の念はまるきり無駄な事だ。

リカルドが私を裏切るなどあり得ない。彼には私が必要なのだから握っていた手を放し、身長差のままに私を見下ろした。

「お探しいたしました。」

この町は今、表には見えぬ危険で満ちています。時には人死にすら起こる。

「ご不満もありましょうが、どうかお戻り下さい」

真っ直ぐな目だった。あの病院で私に忠誠を誓い全身で表し続けてきたその思いを、ようやく私は素直に受け入れられた。

ならば今日の行いは最悪と言って良い。

リカルドを信用していないと宣言したも同じだった。

「ごめんなさい。勝手に抜け出して」

私が告げた謝罪の言葉をリカルドは首を振って拒否した。私の無事を知って、顔は安心した表情になっている。

剥き出しだった極彩色の感情は、いつもの表情の内側に納められた。けれども垣間見たあの鮮やかさが目に焼き付いて離れない。

「いいえ。ハルカ様が謝る事など、何一つありません。

ハルカ様を満たすことの出来なかった私こそが許しを乞わなくては主人に謝らせないのは騎士道精神によるものだろうか。

けれど今回の事はどう見ても私が悪い。ひたすら彼に甘やかされる子供になりたく無い。

「それは違う、リカルド。これは自分の非だと自覚しています。身勝手な行いで、貴方に心配させてしまった。

私の謝罪を受けてくれないでしょうか。

リカルドが罪すら認めてくださらないなら、私はこの事を負っていかなくてはならない」

「・・・ならば、許しましょう。

ハルカ様の言う罪を全て、我が名において」

頑固な私の主張に折れてくれたリカルドが、胸に手を当て重々しく言った。

今のやり取りで、ふと主従二人して頑固で生真面目な性格だと気付く。

意外に、彼と仲良く出来るのかも知れない。ほんの僅かそんな思いが浮かんだ。

そして何よりリカルドが私を必要としている事実、庇護欲に似た感情が沸き上がる。

この世界に来てから、真実私を縁とした者など居なかった。自ら拒んできたのだ。

けれどもここまで私を求めるのならば、リカルドが手を伸ばすのならば、それに付き合うのもまた一興。

暫し胸の中で当てはまる言葉を探し、天啓の如く降りてきたある単語を当てはめた。

そうだ。『弟』のように、リカルドを大切にしよう。

なに、彼の方が年上だとかは細かい事だ。ただの譬えである。

リカルドとの関係を考え抜いて、一番身近な関係に置き換えた末の結論だった。

家族のように彼を慈しみ、変わらぬ友となろう。

私は彼と主従を結んで初めての心からの笑みを浮かべた。

「もう日が暮れてしまいますね。一緒に帰りましょう」

目の前でそんな決意があつた事も知らず、リカルドは私の顔を目を反らさず見てからつられて破顔した。

「・・・はい」

彼の魂を奪われる魔性の顔も、家族と思えば天使の可愛らしい顔に見えた。

夕焼けの空に向かい、二人で足音を響かせる。

何が過ちで何が正しいかなんて分からない。しかし二人の距離が確かに変化した日だった。

第十五話

早朝から起き出して、台所で一人あるものの制作に精を出す。朝食の準備の時間と重なると使用人の迷惑になるので、夜明けと共に動き出した。

人気の少ない時間ながらも下準備の人は既に居り、私を興味深げに横目で見てくる。

この国ではこれの文化は無いらしい。

程なくして完成されたそれを満足げに眺め、大切に大きめの布にそれをしまった。

後はそれを手渡すだけである。

いつものように朝食を済ませてから、部屋に置いていたそれを取りに行った。

使用人に囲まれて出勤しようと馬車に向かうリカルドを呼び止める。騎士の格好をしており、何度見ても彼によく似合っていた。

「リカルド、少し待って下さい」

彼は不思議そうな顔をして、家から出てきた私を振り返った。立ち止まったりリカルドの手に持ってきた包みを手渡す。

「お昼の時間に食べて下さい。味は保証できませんが・・・」

「これは？」

「お弁当という物です。中身は開けてからの楽しみです」朝から作っていた物の正体だ。

普段お世話になってるリカルドに恩返しのもりである。無難に贈り物でも良かったのだが、一昨日の騒ぎから外出は控えている為に却下した。

忙しいリカルドがお昼ご飯を小麦を固めた携帯食で済ませているのも調査済みだった。

「最近顔色が良くないですよ。」

休めない状況かもしれないですが、せめて食事の時ぐらいはゆっくり

して下さい」

リカルドは手にした包みをまじまじと見ると、目元を緩ませた。

「ありがとうございます」

余程嬉しいのか、両手で大切に包みを持った。そこまで喜ばれるなら作った甲斐がある。

「自分の体を大切にして下さい。貴方が倒れては本も子もありません」

「・・・はい」

少し頬を紅潮させて頷き、リカルドは馬車に乗り込んだ。

説教がましくなってしまうたが彼はどうも自分に無頓着なきらいがある。これぐらいが丁度良い。

御者の男が時間を気にしだしている。そろそろ出立しなければ遅れてしまう。

「それでは行って参ります」

「はい、気をつけて」

窓から見えるリカルドに手を振り、遠ざかる馬車を見送る。

馬車の姿が完全に消えた所で、横から声をかけられた。

「ハルカ様、一体中身は何ですか？」

アルフが気づけば私の隣に気配も無く立っていた。

車椅子生活から脱却してアルフとの接触回数は前より減った。

しかし呼び出したい時は直ぐに現れてくれるので、恐らく気づかれないように何時でも傍に控えているのだと思う。

「パンに肉や野菜を挟んだ食べ物です」

「へえ、初めて聞きます」

サンドイッチが存在しない世界なので、物珍しさはあるはずだ。

見送り終えた使用人達が室内に帰っていく。後にはアルフと私の二人が残された。

どうせ暇な身分である。魔術書を写す作業に没頭する前に、このまま屋敷の周りを徘徊してみようか。

歩き出すと、私の数歩後ろからアルフも付いて来た。

「実は少し気になっていた事があるのですが、お聞きしても宜しいでしょうか」

アルフの声を意識の半分で聞きながら、誘うように飛ぶ蝶を視線で追う。

「どうぞ」

「ありがとうございます。」

「昨日ハルカ様が外出された時、私は傍でいつもと同じく控えておりました。」

「どうやって私に気づかれずに出られたのですか？」

「改まって何を聞くかと思えばこの間の脱出の状況が知りたかったよ
うだ。」

「その事ですか。魔術を使っただけですよ」

「魔術を？」

「ええ、本業ですし」

「魔術師でも無いアルフなら、見せたところで原理も分からないだろうと実演してみせる。」

「体の表面に空気の層を作り、音と人の臭いを遮断する。」

「その更に一回り上に光を屈折させる層を作り出す。」

「これで簡単な透明人間の完成である。惜しむらくはその間息を止め
ていなければならぬ事だろうか。」

「ハルカ様!？」

「急に姿の消えたので、慌ててアルフが私の立っていた場所を探す。」

「返事をしたが息を止めていなければならぬ。止める続けるのも
苦しい為、直ぐに姿を現した。」

「こんな感じでしょうか」

「アルフは驚きの表情で私を視認する。手品を見た観客のように目を
輝かせていた。」

「見る側にとって起こす事象は手品も魔術も変わらないかも知れない。
真正面に立っていたにも関わらず全く気づかれなかった。」

「私の魔術の腕もなかなか優れているのかも知れない。」

村では師と私以外の魔術師が居なかつた為に、自分の腕前がどの程度なのか今一知らなかつたりする。

戦地では皆同じような魔術しか唱えないものであるし。少々得意になつた私と対照的にアルフが眉を曇らせた。

「これではハルル様がまた抜け出されても、分かりませんね」

「・・・もう抜けだしたりしませんよ」

流石に二回も同じ轍を踏むつもりは無い。十分に懲りた。

アルフなりの冗談だつたのか、苦々しい表情に変わった私に苦笑した。

「ええ、信じています」

狡い人だ。そう言われては、ますます抜け出せない。

不必要な遠慮が無くなり、次第に私の扱い方を皆分かつてきた気がする。

その事をこそばゆくも嬉しく思った。

俺は騎士仲間であるリカルドの様子を伺いに普段彼が利用する休憩室を覗きに来て、不思議な光景と出くわした。

相貌を崩してリカルドが一つの箱を眺めていたのである。

非常に珍しく浮かれている様子に、箱をよく観察するとそれはどうやら食材らしかった。

しかし何とも飾り気のないというか、素朴さがにじみ出ている。

俺はつい心に思ったことをそのまま口に出してしまった。

「リカルド、携帯食に飽きたのか？」

どうせなら食堂に行けばまともな物も食えるだろうに」

刺々しい表情でこちらに視線を向けてきた。半眼のままの目つきは威圧感があり心臓に悪い。

どうやら俺は発言を誤つたようだ。リカルドの機嫌を取ろうと頭を働かせる。

原因は今食している物を貶した事だろう。

見慣れない食事は料理人が作ったにしては簡素で拙い。自分で作った可能性もある。

「あ……っと、よく見たら旨そうだな。俺にも少し分けてくれな
いか？」

「黙れ。少しでも口にしてみる。地獄を見せてやる」

取り付く島のない返事に、更に選ぶ言葉を間違えた事を知った。

この返事から判断するとどうやら誰かに作ってもらった品のようだ。持ちやすい大きさに切り分けられたそれを、リカルドが自分の口に運び込む。

そして、目元を緩ませて静かに微笑した。

たった一口で機嫌を直した様子に、少し製作者の察しがついた。

「誰が作ったんだ？」

「私にとって、大切な方だ」

そうだろうとも。でなければ彼がここまで幸福そうにしている理由が分からない。

先日の、リカルドが搜索していた人物と同じ人だろうか。

「どのような方なんだ」

「そうだな……尊敬している」

リカルドは少年のように瞳を輝かせてその人物について説明した。

かの人について思いを向ける時は、今まで見たどんな時より幸せそうな表情である。

やはり。

胸の中で臆気だった予想が明確な形を得て確信に変わってゆく。

彼がその人に向けるそれは何より尊く、傲慢で、絶対的な感情。

「そして勇ましくも優しい……男性だ」

俺は暫し沈黙した。胸の中で耳から入った情報をもう一度繰り返し返してみる。

念のため、その単語の意味を頭で確認もした。残念ながら間違っ
てはいないらしい。

「男なのか」

「男だが」

淡々と言葉を返すリカルドには迷いが感じられない。それを障害とも思っていない。

衝撃的な事実に驚いているのは俺だけなのか。

それとも本人が既に乗り越えたのだとしたら、第三者が口出しする事では無い。

俺は混乱しながらも、重要な事だけは伝えておかなければと焦る。

「俺は、君が、一体どんな好みをしていようが君の味方だ」

顔を直視出来ず目を背けていたため、リカルドが首を捻っているのも目に入らなかつた。

「・・・そうか」

「ああ。悪いが、俺はもう行く」

立ち直るのには少し時間がかかりそうだ。壁を伝ってふらつきながら退室した。

あの顔立ちでは選り放題だろうに、何故茨の道を行くのだ。

むしろあの美貌だからこそ女に飽きてしまったのか。顔の良い男は同性愛者が多いと聞く。

リカルドは男が恋愛対象だったとはな。彼の同性として一番近い人間関係を友人であると思いきみ、実行してきた俺は間違えたのだろうか。

いや、リカルドは元々その方面に頓着する性質の人間ではない。

男女関係なくその人物だからこそ恋に落ちたのだろう。

俺は胸に溜まった重い息を吐き出し、鍛錬所へを足先を向けた。

二等兵達の悲鳴が聞こえるのは暫し後の事である。

第十六話

相変わらず部屋と屋敷の周りだけを行き来する日々が続いている。変わったことと言えば、監禁されているような閉息感が消えたことだろうか。

心配性の彼を安心させてやるために、大人しく屋敷に居てやるのだと思えば少々の不自由さも受け入れられた。

庭に出ると乾燥した空気が吹き荒ぶ。此処の季節は湿度によってのみ変化する。

極端な暑さも寒さも無く、ただ乾期や梅雨のような時期に合わせて植物達の様相が変わっていくのだ。

これからは乾燥に強い植物達が栄える季節になるだろう。その後に大雨が頻繁に降る雨期がやってくる。

この季節にしか手に入らない薬草を仕入れておきたいのだが、頼めば誰か代わりに購入してくれるだろうか。

アズリの花の盛りは終え、小道を彩っていた一角は葉の緑に置き変わっていた。

花卉が茶に変色する前に庭師が切り落としたのだろう。

足を進めていくと、支えにした事のある木が風に煽られさざめいた。別段普段と変わった様子は見られない。

しかし、後ろに控えていたアルフが不意に前に進み出た。

表情は固く、私の外出を断った時に見せた冷たさを感じた。

木に鋭い視線を向け、体で木から隠すように私を背後に庇う。

場所も傍にいる人も全く異なったが、アルフから感じる緊張感が私を一気に戦場に引き戻した。

危険が迫っている可能性がある。状況を把握し、直ちに戦いの準備を。

私は前方以外に目を配り、人が隠れそうな場所に意識を向けつつ早口で術を唱え始めた。

最も早く効果が得られそうな術を何時でも放てる状態にする。早鐘のような心臓の音が、耳に喧しく響きだした。

木の枝が不自然に大きくしなる。何者かがあの中に潜んでいる。

「誰だ！」

切りつけるように鋭い声がアルフから発せられた。

潜んでいる事が暴かれ、枝の隙間から慌てた動きをする黒い影が見える。

周囲に目を向けたが他に動きはない。単独のようだ。

しばらく木の上でもがいていたその影はアルフの視線が全く外れない事に気が付き、諦めたのか降るように降りて地上に足を着けた。

顔つき背格好は少年と青年の間ほどの幼いもの、髪は金で目は碧。

魔術師が作業着として好むローブを羽織っている。生地材質から判断するに高そうなローブだ。

隠れることを想定していない格好に私の緊張が緩んだ。

「痛ててて・・・着地失敗した」

言いながら足首をさすって痛みを和らげようとする姿は無防備である。

アルフは視線だけ私に向けてどうするか訪ねてきた。

不審者は警戒されているのも気が付かない暢気な体で、まだ足首をさすっている。

害は無さそうだったが、私も口に出さずに首を上下させてアルフに答えた。

「誰だ」

アルフの問いかけに不審者は背筋を伸ばし、不審者らしからぬ礼儀正しさで名乗った。

「あ、こんな所から失礼しました。

僕は魔術師・・・を指しているライダー・レイスと言います。

あなた方はこちらのお屋敷に使っている方でしょうか」

「だとしたらなんだ。今日、来客の予定は無い」

ようやくこちらが険しい視線を向けている事に気づき、ライダー

と名乗った彼は困ったように頭かいた。

おっとりしていながらも感じる品の良さは育ちのいい証だろう。

「すみません、一度正面から伺ったのですが断られてしまいました。こうして不躰ながら壁を伝って入らせていただきました」

「用件は」

その一言にライダーは途端に瞳を輝かせて興奮しながら話し始めた。

「ああ！それなのです！

こちらにあのご高名な、ヘダリオンの英雄がお泊まりになられているとお聞きしたのです！

是非とも師事したく、こうして参りました。どうか会わせて頂けませんか？」

ヘダリオンの英雄？それは先日聞いたあの事だろうか。それが何故、この状況で出てくるのだろうか。

アルフは奇妙に体を強ばらせ、眠れる虎の眼前を横切るように慎重にそつと尋ねた。

「何処でその話しを？」

「ヘダリオンに赴任した方々から彼の人について聞いて回りました。いやあ、皆さん何故が一貫性がなくて苦労しましたが」

では彼は勘違いしているのだろうか。この屋敷に客人は私以外にはいない。

警戒を解き魔力を霧散させた私とは裏腹に、アルフはまだ険しい目つきでライダーを睨みつけていた。どこか焦った様子でもある。

「残念ながら、話している方は居ない。帰ってくれ」

「では僕の眼で確かめます。この屋敷に誰かが招かれているのは知っていますし。」

僕だって生半な気持ちでやってきたわけではありません。

ブラムディ卿には後ほどアグネスタ家から謝罪いたします」

この言葉を聞いて苦々しい気持ちになった。目の前の御仁は貴族の人間だったらしい。

強引に家に不法侵入したかと思えば、これから更に屋敷の人間に迷惑をかけると宣言し、しかも実家の名を使って脅している。

アグネスタ家は確か伯爵位だっただろうか。しかし魔術師を目指すならば、皆家を捨てるものだ。

魔術とは師から弟子にのみ伝わる秘術であり、実家にも他言してはならない。

その為に家との関わりを師によって絶たれる事が魔術師の慣習となっていた。

魔術師を目指すとは嘯きながら家の力に頼るその態度が、魔術師として腹立たしい。

しかしそれを彼に改めさせる気にもならず、早々に関わりを絶ちたく思った。

だから私は彼の思い違いを正そうとした。過ちに気付きこの屋敷から出ていくことを願って。

「ヘダリオンの英雄とは、敵兵を薙ぎ倒した屈強な剣士でしょう？ 魔術師を目指すライダー『閣下』が何を思っただ剣士に弟子入りしたいと思ったのかは存じませんが、この屋敷にお探しする人物に該当する方はいらっしやいません」

呼称に込めた皮肉に気付いたのか分からないが、ライダーは言った私をおかしげに見やった。

「そんな噂も流れているようですね。」

誰が言い出したのか知りませんが、違いますよ？」

瞳を輝かせ一呼吸おいた後、やけに勿体振った口調で彼は言った。

「ヘダリオンの英雄とは、憎き敵国ヘリオットの洞穴作戦を一撃の元に打ち崩し、傷つく前線の兵士を死の淵から救った・・・偉大なる魔術師の事です」

私はその一時、呼吸の仕方すら分からなくなった。

第十七話

頭の中を思考が渦巻いて気持ちが悪い。

該当する人物がたつた一人しか思い当たらない。

もしもそれが私だとするならば、私は一体何を成してしまったのか。私が英雄なんて、度の外れた冗談か妄想だった。

ここに居るのは死を恐れて逃げ回った鼠のような人間だ。

あの戦場にも、彼の憧れている人物の欠片も無かった。

悪い夢から醒めることが出来ない。握りしめ血の気の失せた拳から、鈍った感覚が伝わった。

私の罪を眼前に突きつけられるよりも、顔も知らない人間から得体の知れない期待を抱かれる方がずっと恐ろしい。

足下を支える大地が水に変わってしまったような不安定さ。

アルフが私の名前を呼んだことにも気付かず、俯いて強く眼を閉じた。

知っていてあえて目を逸らしてきた幾つかの事が、私をなおも追いつめる予感がする。

考える時間が欲しい。大して賢くもない私が、状況を理解するため。

今過ちを犯せば、取り返しの付かない事になるだろう。

しかし彼の英雄の幻影を求めてやってきた、得体の知れない厄介な立場の人間が目の前に居る。

私は考えが纏まらないながら、ライダーへの対処をしなければならぬ事に困り果てた。

黙り込んでしまった私に代わり、アルフが彼へ厳しい眼を向けて突き放したように言った。

「・・・何度も言いますが、貴方の仰る方はこちらにはおりません。今招かれているかたは我が主の賓客。お通し出来ません」

ライダーは苛立ちを隠さずに、威圧的にアルフに対抗した。

「ですから、後ほど正式に謝罪いたします。

僕は諦めるつもりは毛頭ありません。紹介して下さいなら、自ら探しましょう」

不敵な態度に舌打ちが今にも聞こえそうなほど苦々しい顔をして、アルフがライダーの顔を遮った。

私を守るよりも、そう行動した方が不自然に思われないと考えたのだろう。

少年の域を抜けきらないライダーを、成熟した男性のアルフが見下ろした。

二人の視線が交わり、どちらも先に外そうとはせず睨み合った。

互いに譲らない様子に黙っていられず、躊躇いながらも私はライダーに声をかけてしまった。

「何故そこまでお会いになりたいのですか」

ライダーが私に視線を移し、愚問だと一笑に付す。

「ヘダリオンの英雄ですよ？」

200年前のマークレイドと並ぶとされる、偉大な魔術師です。

これほど師として仰ぐべき素晴らしい人はいない」

マークレイドとは、歴史に名を残す大魔術師の名だ。

これでは世の中ではどれだけ誇張された話しが蔓延しているのだろう。

「会ったことも無いのですか」

「会わずとも、その功績が既にその人の偉大さを伝えていきます」

その盲目的な態度に腹が立ち、気付けば私は彼に尋ねていた。

「ではその偉大な人物の弟子となり、貴方は一体何を目指されるおつもりか」

呆れた口調で聞いたその問いに、ライダーは初めて言い淀んだ。

大方幼い憧憬と熱意だけでやってきたのだろう。だからこんな問いにも答えられない。

「貴方には関係の無いこと。・・・彼の人に会って、直接話します」

口先だけでそう言い、答えられないのを誤魔化そうとしているのが

分かった。

「敵を打ち払う魔術を修めるために？人を癒す術を習うために？どちらも英雄の弟子とならなくても、可能な事でしょう。己の努力さえあれば」

「僕は！彼の人のような偉大な者となりたいから来たのです！」

「ならば尚更。後を追うことしか考えられない者が、並び立てる筈もない」

歯を食いしばったライダーに睨まれてしまった。

調子にのって、ライダーを必要以上に責めてしまった事を反省する。

どうも私は彼のことが入らないようだ。

ライダーの未熟さは自分にも覚えのある事で、自分の恥じる部分を持つ彼を苦手だと思ふのかも知れない。

思いこみだけで行動し、周囲の人の心など考えない未熟さだ。

自覚していながら直しきれない自分の欠点。

「もしも此処に居る人物が貴方の探す人だったとして。

その人は無理矢理人の家に押し入った貴方をどう思ふのでしょうか」

「それは・・・」

自分の気持ちに気付いていながらも止まらず、思わず毒づいてしまった。

彼を導こうとしての事でなく、全部自分の為だ。言うてから後悔した。

なんて器の小さい人間だろう。彼が知らないとはいえ、自分を慕う人間を理由なく非難してしまった。

ライダーは根は素直な人間なのだろう。私の言葉に何やら考え込んでしまった。

他人を顧みない直情型ではあるが、人の話を聞けるうちはまだ大丈夫だと思われる。

「過ぎたことを言い、失礼いたしました。

けれど屋敷の中へ自らの判断で招き入れるわけにもいかないこちら

の事情もどうかお察し下さい」

私が見用人を装ってライダーに頭を下げると、彼は先ほどとは違った穏やかさで大人しく頷いた。

「・・・今日は帰ります。騒がしくして申し訳ありませんでした」
ひとまず落着いたらしい。私達のやりとりを見守っていたアルフが進み出た。

「では私が門までご案内いたします」

先導するアルフに付いていったこの騒動の元、ライダーの姿が建物の影に消え見えなくなった。

それにも関わらず、私の心は乱れに乱れている。

どうやら私は、大変な事態になっているらしい。

第十八話

初めて入ったりリカルドの書斎は両脇を本棚で埋め、奥に書類の積んである黒い机が置いてあった。

その手前に接待用の向き合った椅子と丸机があり、実用性を追求した内装となっている。

奥の机に座っていたリカルドは、私が部屋の扉を開くなり書類から手を離し立ち上がって、扉の前で佇む私を部屋へ招き入れた。

「来られると思っていました」

恐らく昼間の報告を聞いていたのだろう。

窓の外は既に夜の色に染まっている。にもかかわらず、部屋の中は燭台の明かりで十分に明るかった。

リカルドが引いてくれた丸机の前の椅子の上に腰を下ろす。

騎士の作法なのか分からないが、正面の椅子の横に立ったままのリカルドに着席する許可をだした。

他に人のいないこの場では、リカルドはあくまでも主従を貫きたいのだった。

「失礼いたします」

私よりずっと綺麗に流れるような動作で椅子に座った。

所作までも貴族らしいこの人は、今背を丸めて座る私を緊張した眼差しで見つめている。

私もまた、昼間からずっと考え続けている件の話で口の中が乾燥しきってしまう程緊張していた。

「ライダール様の事は既に知っているのでですね」

これはただの確認事項である。リカルドはわずかに視線を下げ、肯定した。

「はい」

「また来られるようなそぶりでしたが、次はどう致しましょうか」

「ご安心下さい。アグネスタ閣下とは商業上の取引もしております。」

今回の事をそれとなくお伝えするだけで済むでしょう。

利害の分からぬほど愚かではありません」

ではもう二度とあのような事態はないと考えて良いだろう。

彼の暴走する情熱を再び相手にする必要が無いと知って、その事には安堵した。

けれども私はいよいよ、恐るべき事を尋ねなければならなくなった。自分が正に当事者であり、看過する事も出来ない大きな問題である。壁掛けの時計の秒針が声高に私に次の言葉を促し続けている。

正面に座るリカルドは、ただ黙して何も語らない。青い眼が静かに見守っていた。

「私は」

長い時間をかけて一言目を絞り出した。

震える指先を握って押さえ、前かがみになって背中から感じる薄ら寒さを耐える。

次いで出した声は隙間風よりかすれて、消えそうな弱々しいものだった。

「何者になったのですか？」

答えを言うなと願いながら、彼の唇が開かれるのをただ見るしか出来ない。

哀れんだ眼差しで、私の騎士が朗々と宣告した。

「戦を治めた魔術師。優れた癒術者。・・・救国の、英雄」

リカルド。私はその言葉を、一番聞きたく無かった。

恥じれば良いのか、悔いれば良いのか、恐れれば良いのか、分からない。複雑な感情が胸に去来する。

頭を両手で抱え込み、決壊した理性の代わりにはらはらと涙が頬を伝って落ちた。

そう呼ばれるまでに私は殺人を犯し、そう呼ばれるまでに私は人より恨まれている。

戦場での事はどれも私にとって誇ることでなく、目を逸らしたい過去ばかりであった。

平穩を取り戻し安寧を見つけた今になって、逃れられない事を自覚させられた。

英雄。なんと輝かしく馬鹿馬鹿しい呼び名であることか！
その称号が重すぎて潰されてしまいそうだ。

苦しくて、私は理性も持たない小さな獣に変わる事を本気で考えた。例え人に戻れないとしても、そうなれば己の世界の中だけで生きていける。

意味を成さない呻き声が口から漏れた。そんな私に、声が上から降ってきた。

「ハルカ様、私が居ります。貴方の剣であり盾となる」

いつの間にか傍に立っていたその人は、何もかもを知っていた様子で強く言った。

「全てからお守りいたします。恐れることは何一つありません」

抱えていた頭を上げ、覗いたりカルドの目は光しか見あたらない。

私は納得して歪に口角をつり上げた。それは随分と疲れた笑いになつてしまった。

「遠ざけてくれたのですね」

暢気な私は周りで何が起きているのかも知らずに、勝手に一人で拗ねていた。

知ってから思い返してみると、色々なことが見えてくる。

庶民では入れない病院に入院していたのは何故か。

リカルドが人嫌いから社会的に転じたのはいつか。

屋敷に戻って来れなくなつたのは、私がなんと言った後か。

体が満足に動かない間も、今このときも。初めて会った時からずっと守ってくれていたリカルドの息づかいに、ようやく気づいた。

「私は貴方からどれほどの恩恵を受けていたのでしょうか」

そして過去を振り返る内に一つ思い当たってしまった。

私を外に出したからない事と、アルフの存在を思えば自ずと見えてくる。

私はこれからも、リカルドを必要とするのだ。

過去は決して忘却を許してくれないらしい。

黒く禍禍しい手が、私の足首を掴んで引きずり落とそうとしている。私は自分の考えを殆ど確信してリカルドに尋ねた。

「命が、狙われているのですか？」

臉を伏せてリカルドは恨み言を言った。

「貴方の聡明さが今は憎らしい」

では、やはり。何もかもが終わってなどいなかったのだ。

私は戦いの最中であり、リカルドが目を覆ってくれていたに過ぎない。

今日までの穏やかさが夢であった。

「アルフは私の護衛ですか」

いつも私の後ろで控えていた姿を思い出す。剣を握るものの手をした、ぎこちない使用人。

雇われたのも私が屋敷へ滞在したのと同じくらい新しい。

気づける要素はいくらでも転がっていた。その何もかもに私は目を向けなかった。

「傭兵アルフレド。貴方の次に名を馳せた男でしょう」

「・・・耳にした事があります。勇ましい傭兵がいると」

まさかこんな身近にいるとは思わなかった。あの傭兵らしからぬ穏やかな顔から想像もつかない。

傭兵という事は、金を払って雇ったのだろう。

戦場で最も武勲を立てた男に使用人紛いの事をさせるだけの金額とは幾らばかりか。

「貴方がしてきた事を話して下さい。リカルド」

嘘偽りを述べる気配があれば、初めて彼に『命令』する事も辞さない覚悟でリカルドに言った。

「全て」

第一九話*

正面からハルカ様の視線を受け止め、私はその力強さに状況も弁えず圧倒された。

出会った時と同じ眼の強さであり、今尚私を魅了してやまない彼の強さ。

あの時他に失う物など無かったが故に、魂を揺さぶった邂逅に全てを懸けた。

例え自分が彼にとって都合の良い道具と成り下がったとしても、元々捨てるはずの自分であったと、失うものは何も無いと思っていたのに。

私が願うのはただ一つ。この方が心安く過ごされること。

そのために隠していたあらゆる事を、ハルカ様がどうお感じになれるかが不安だった。

けれども望まれるならば、私に拒否する選択肢は存在しない。

「お話致します」

私は会つてからの行動を全て、主に晒す事にした。

過去の出来事をなるべく忠実にお伝えする。

「ハルカ様が意識を失われていた間、既に私はこのような事態になると臆気ながら想定しておりました。

目の当たりにしたハルカ様の奇跡にあの時誰もが心震えた。その最たる人物が私でしょう。

だからたやすく想像できませんでした。良かれ悪しかれ、貴方の元に人が集うと」

ハルカ様が何を望まれるか、私はその時何も知らなかった。

けれどもその時ハルカ様は余りにか弱くあらせられたので、獣のような輩の目を逃れる事をまず最優先とした。

「ハルカ様の御身を病院に預け、ハルカ様が目覚められた後は面会に訪れる人物に渡りをつけました。

彼らに情報の攪乱をお頼みしたのです。皆、非常に協力的で今日までハルカ様の事が特定されなかったのも、彼らの働きが大きいでしょう。

特にバスカ・マルグ殿は並々ならぬ働きをして下さった事をお伝えしておきます」

「彼が・・・」

最もはじめに面会に来た青年のことを、ハルカ様も覚えていらしたご様子だった。

市民に正しい情報を知るものが少ないのは、彼のおかげである。

彼は吟遊詩人を自ら雇って誤った話を蔓延させたのだった。

市民の生活に根付いた巧妙な手段を用いて虚偽を広めた手腕は見事と言っほか無い。

「首都に先に戻った時、アルフレドを雇い貴方を守る護衛と致しました。

そして貴方を屋敷へと迎えてから、私はひたすら自身の力を蓄える事に終始しておりました」

言葉にしてしまえば、たったそれだけの事である。

しかし、行ってきたのは言い尽くせない程多くの事だった。

昔の誼を頼り、あらゆる場所で顔売り歩く。貴族の力とは、人脈に寄るところが非常に大きいからだ。

例えばハルカ様が名声を求められたとして、後ろ盾となりそうな人物は誰か。

例えばハルカ様が過去を消したいと願ったとして、それを管理しているのは誰か。

財力も、元ある分だけでは心許ないものだった。

目端の利きそうな人を集め、事業を展開し、更に利益を。

渴くように私は力を求めた。けれども足りない。覆い隠すにはまだ足りない。

貴族の間にさりげなく虚実を蔓延させ、金を握らせ裏の世界の話聞いた。

「徴兵簿よりハルカ様の名を消す事は叶いましたが、人の口に戸は立てられません」
あの場に居た者に直接問いたたして行けば、いつかは真実へとたどり着かれてしまう。

しかしそれにどれだけの労力が必要な事だろう。
ライダー殿はその部分において、確かな熱意を持っていた事が伺える。

私が主に望んだ人が願った事は元の生活に戻りたいというささやかなもの。

それを叶えられないほどに我が国は英雄を求めていた。

「激しさを増す戦い。皆は既に二つヘリオットの手に落ちた。

これ以上落ちれば本当に喉元に剣先を突きつけられるようなものでした。

それを守りきり、大きく戦力を削いで撤退させた実績こそ、人の目に希望と映った事でしよう」

そして轟く名声はヘリオットの国まで届いてしまった。

被害を生み出したのが、たった一人だと向こうも気づいたのだろう。戦略による被害ならば対策は知略で勝るしかない。

しかし、一人ならばそれを消せば良いだけだ。

「ヘリオットがハルカ様の命を狙っています」

ハルカ様は表情を変えずに私を見ていた。

絶望や諦めなどは伺えず、ただ現実を受け入れて考えを巡らせているようだ。

私は自分の主を見くびっていたらしい。思うよりもずっと強い方だ。密入国者の足取りから英雄の居場所を探している事が分かった。

戦場では叶わずとも暗殺ならば、という狙いだろう。

残念ながら探しだし摘発するまでには至っていない。

その事もお伝えすれば、ハルカ様は疲れた表情をして私を見上げた。

「貴方は・・・全く。有能過ぎる」

「ありがとうございます」

「寝ていません。そうして私が知らない間、寝る間もなく動き回っていたのですか？」

私の背負うべき重荷を背負い込んで」

言いたいことが理解出来なくて困惑する私に、ハルカ様は苦笑した。「私の事で貴方が手を尽くしてくださって、本当に嬉しい。」

けれど貴方を損なうならば、意味がありません。」

気づかない内に、私は貴方を修羅場へと送り込んでいたようですね」言葉の裏にあったのは私を案じてくださる心。

私が、使える貴方の剣でなくとも構わないと暗に伝えられた。

ああ、そうか。

この方にとって私は唯一人。間違いなく個として見てくださる。

私はハルカ様にとって、道具とは成り得ないのだ。

私に誠実に接して下さるが故に私の心は益々見えぬ鎖で囚われる。心を添わず事を願う、この私の思いは何なのだろう。」

椅子に座る様子は泰然として自らの呼び名を知ったときとはまるで違う。

ハルカ様にとって、命を狙われる事は自らが『英雄』と崇められるより小さい事のようにだ。

理解出来ない思考回路だがそれが全くこの方らしい。

「私の事は私自身が・・・と言いたい所ですが、私一人では重すぎる荷のようです。」

貴方がいてくだされば、これほど心強い事はない。手伝って頂けますか？」

「勿論です」

私に氣遣ってそう言ったようだったが、きっと何もなければこの人は一人で解決しようとするのだろう。」

衝動に任せた契約だったが、この方の人となりに触れて自分の直感とは間違えなかったのだと確信した。

私と共に捨てられた屋敷を、ハルカ様は気に入ってくくださった。

それがどんなに私の心を慰めたか。まるで私も許されたような気持

ちになった。

人に純粹な好意を抱くという経験に戸惑い迷いもしたが、それを受け入れた世界は何とも愛おしい。

思う人から誠実さを返される幸福を教えて下さった。

その事がどれだけ自分を舞い上がらせ、ハルカ様への忠心を深めているかお気づきではないのだ。

第二十話

命が狙われているとなれば私は戦わなくてはならない。

自分が祭り上げられるだけであるなら、勝手な期待を抱く人間達から遠ざかれれば良いだけの話。

しかし私を疎んじる者はそう簡単にはいかないだろう。

「私が何も気付かないままだとしたら、リカルドはどう対策をするつもりでしたか？」

リカルドは完璧な笑みを浮かべて、その質問がされることを予想していたように淀むことなく答えた。

「ハルカ様の身を狙う不届き者を見つけたし排除した後に、最もらしい背格好の人物にでも国外へ出ていただく予定です」

「それは、今の私の姿と同じ子供という事ですか」

「はい。国境を越えさせれば良いだけですから、さして危険は無いでしょう」

提示された案は直ぐに同意してしまいたくなる程とても魅力的だった。

それが実行されれば、私はかねてより望んでいた村へ帰るといふ願いを実現出きる。

喉が渴いた時に差し出された水のように、即座に手を伸ばしてしまいたくなった。

けれど頭の何処かで小さく囁く違和感が自分を押しとどめる。

よく考えて判断しなければ、後で後悔すると予感が告げた。

目を瞑ってしまえばこのまま過ぎてしまえるのに、そう出来ない自分に呆れながら諦めた。

「性分です」

「・・・ハルカ様？」

つい出てしまった言葉に、唐突過ぎて理解出来ないリカルドが首を傾げた。

この青年は絶対的な私の味方ではあるものの、私の一部ではない。現に全てから遠ざけ、守ろうとしたように私の意図しない所で動く事もある。

曖昧模煇な疑問を探し出して口に出して整理する。

「ヘリオットが私を狙う理由は？」

「ハルカ様を脅威と感じているからでしょう。」

あの戦いによる戦功は大きく、また英雄が死したとなれば我が国の志気も下がります」

「私が誰か知るものが限られているというのに、志気が下がるはずもないのでは。」

いくら多大な被害をだしたからといって、所詮はただの無名の魔術師です。

何故あの国はこうまでして私を邪魔だと思うのですか」

「貴方の成し遂げた事は、貴方が思った以上に大きく人の心に写っているのです」

「であるとしても、王族や軍幹部の方を私なら狙いますが」

「勿論、ご指摘した方々も隙あらば命を狙われるでしょう。」

けれどもヘリオットは特に我が国の魔術師を毛嫌いする伝統がある。200年前の恐怖を未だ拭えないのです」

私が狙われる理由に思い当たり、深い溜息を吐いた。

昔、今と同じようにヘリオット国が攻め込んできた事があった。

当時のヘリオットは今より領土も有する兵士の数も多く、誰もが口ライツの敗北を予感したという。

それをたった一人で覆ったのがマークレイドという魔術師だ。

幼少時から神童として名高かった彼は、戦時において敵兵の悉くを尽滅したらしい。

余りの被害に領土を維持する力すら失い、ヘリオットは縮小したという。

亡くなったのはもう半世紀も前だというのに、まだ覚えているとは。・・・なるほど。私をマークレイドに重ねているんですね。

納得のいく理由です。新たな疑問が浮かぶ程に」

私は目の前のリカルドを睨みつけた。

「過剰な恐れを抱くヘリオットが、国境に出国する似た人物を見かけるだけで諦める訳がない」

そして貴方はヘリオットの搜索を許さないでしょう。やるなら徹底的だ。

この麗しい見た目からでは想像もつかない苛烈さを、私は知っている。

「影武者を・・・殺させようと思いましたね」

リカルドはしばし沈黙し俯いていたが、やがて吹っ切れたように顔を上げた。

「どうか、目を瞑っていただけませんか。

この場所で今までと同じように暮らされるだけでハルカ様は・・・いえ、私は、求めるものを手に入れられるのです。

子を殺す罪も罰も、私一人が勝手に行ったこと。全て私が負いましたよ」

リカルドは私が、子供を殺す事を罪と思い罰するべきだと思っていたと考えているらしい。

確かに昔ならば、そのような非道を思いつくことすら拒絶していたに違いない。

けれども散々人を殺してきた私が、今更リカルドが人を利用し殺そうとしていることを咎められるのか。

子供だから大人よりも命の価値が重いとでも非難するべきなのだろうか。

私は、自分の譲れぬ物のために命を奪う行為について、何ら語る術を持たなかった。

しかし一つ言えることがあるとするならば。

「貴方は、その身の主として私を選んだ。

ならば貴方の行動における責任の全ては、私の所有物です」

否定の言葉を予想していたのだろう、リカルドは驚き目を見開いた。

手を伸ばせば直ぐ傍に佇んでいたリカルドの腕に私の指が触れる。少し念じただけで皮膚の下に渦巻く、まじないの文字が黒々と浮かび上がった。

これが彼の中を無尽に駆け巡っている限り、私と彼の縁は絶えない。白い肌に数珠状に黒く這うそれらは指が離れた途端、大人しく潜り込み見えなくなった。

「では・・・？」

その先を口に出さずにリカルドに問われる。

頷いてしまいたい欲望も胸には存在したものの、私が出した答えは結局首を横に振ることだった。

「いえ、その選択肢は必要ありません」

「何故」

「貴方にそれを選ばせたくない。」

その上・・・私が亡くなつたと知れば、ヘリオットは再び攻めてくる可能性があります。

この国の安寧の為に戦地へと赴いたのに、私が隠れる事で乱されるならば意味が無い」

逃げようと思えば幾らでも逃げられた。顔を変える魔術師を捉えられる者など、同じ魔術師ぐらいなのだから。

では逃げようか・・・何処へ？この地の果てまで歩んだとしても、故国には辿り着かない。

師と暮らしたこの地以上に愛着のある場所はない。

失うのは一度で十分だ。だから私は守ろうとした。ならば。

私はリカルドに向かって不敵に笑った。

「立ちましよう。国を守る英雄として」

あれだけ恐れていた英雄という単語を用い、敢えて好まない大口を叩く。そうでもしなければ震えてしまいそうだった。

正直な所、自分にそれだけの實力があるかなんて分からない。

しかし例えまやかしたとしても、信じ込ませてしまえばいいのだ。

この国には一千幾万の兵を阻む巨人がいると。

「・・・ハルカ様」

眉を下げ、悲しげな男の顔が目映る。リカルドは私が本心から称号など嫌っている事を知っている。

今までして下さった、貴方のご厚意を無にしてしまいました。

神に懺悔する信徒のように深く俯けば、聞き慣れた声が胸の奥から響く。

その声は悔恨に満ち、嘎れた老人の声で「すまない」と一言呟いた。

第二十一話

扉を叩く音に「どうぞ」と返せば、見慣れた男が入って来た。

焦げ茶色の髪はこの国では珍しくない容貌である。

しかし平凡そうな見た目とは裏腹に、戦地においては多くの命を刈り取ったという傭兵だとは誰も気付くまい。

「アルフ・・・いえ、アルフレドとお呼びした方が良いでしょうか」

アルフレドは思い当たる事があつたようで納得した顔をした。

「昨夜お話されていた事はそれでしたか。どちらでも構いませんよ」
ライダールが侵入した時に同じ場に居た為、ある程度の察しがついていたようだ。

「アルフレドに一つお聞きしたい事があります」

私がこの部屋にアルフを呼んだのは、好奇心も多分に含んだ質問を試してみたかっただけである。

「何なりと」

そう言つて野生的に口角を上げて笑つた。傭兵と知れた事で、粗野な元来の性質を表に出したらしい。

粗暴でさえなければ許容範囲どころか、その荒々しさは私にとって身に馴染むものであつた。

「ただの興味本位な事です、無理に答えなくても良いのですが、護衛の任はともかく使用人として振る舞うとは、傭兵としては余り受け入れがたい申し入れではなかつたのでしょうか。」

私はリカルドとアルフレドの契約については全く耳にしてないので、何か理由があればお聞きしてみたいな、と」

「成る程。リカルド様にはお聞きにならなかつたんで？」

「ええ、私が聞きたいのは金額云々よりもアルフレドの気持ちなので」

「それはなかなか、答え難い事をお聞きになる」

「ですから無理しなくともいいですよ」

少々頑固ともとれる私の発言を聞いてアルフレドは苦笑する。

答える気になつたらしく、顎に手を当て懐かしむように目を細めた。

「確かに、金額には心惹かれましたね。傭兵稼業は稼げるうちが華ですし。」

けれども、他に思うところがあつたのも嘘ではない」

「と言うと？」

「私の故郷は昔から傭兵者を多く出している村でして、そこでは純粹に力のある者に対して敬うような気質がありました。」

そして例に洩れず、私も見ず知らずの英雄とやりに尊敬の念を抱いていたんです。

話を持ちかけられた時、正直な感想を言わせて頂くならば『惜しい』と思いました」

「惜しい・・・ですか」

「ええ。あれだけの活躍を見せた者が伏している間に消えるのは、惜しいと思つたんです。」

現場で戦っていた分一般人より早く噂を聞いてはいましたが、ある程度の誇張が入っているにしても十分評価されるべきものでしたから。

最初の動機はそれでしたね」

ではアルフレドの故郷の気質に感謝しなければならぬ。

彼の話に聞き入っていると、アルフレドが少々意地の悪い表情をした。

「けれども今は若干の変化がありますよ。」

余りにも無防備すぎるハルカ様が、見てはいられないんです」

「・・・どういう意味ですか」

幼児の面倒でもしているかのような単語を使うものだから、私は怒るところか呆れた顔をしてしまった。

「これほどまでに無自覚で無防備な人に、初めてお会いしました」

そう言つて笑いを堪えるように口元に手を当てる。

世間慣れしていない分、ある程度の事は認めるけれどもそこまで笑われるほどのものなのか？

首を捻る私にアルフレドが細目でちらりと視線を向けた。

「少し前に目の前で姿を隠す術を見せて下さったでしょう。」

魔術の感知が殆ど出来ない。あの技術でしたら王すら容易く暗殺出来るに違いないでしょう。

にもかかわらず、本人はそれに全く気づいていないんです」

そこでようやく笑いを治めたアルフレドは、今度は親愛の微笑で私の顔をのぞき込んだ。

「貴方は不思議な方だ。」

守らなければならぬ事は幾度もありましたが、守りたいと思わせられたのはハルカ様が初めてです。

契約とハルカ様のお人柄が変わらない限り、私はハルカ様をお守りしましょう」

アルフレドの言葉を聞いて私の中に、温かな重みをもった安心感が生まれた。私はその一言を言つて欲しかったのだ。

「ありがとうございます」

「いいえ、それが私の務めです」

そうして互いに相好を崩した後、アルフレドはいつも通りの様子に戻り言つてきた。

「そうそう、リカルド様より昼頃連絡がありました。」

ハーシー・ブリジステイン男爵令嬢が早ければ来週よりお越しになつて下さるそうですよ」

「そうですか」

流石、仕事の早い男である。私に礼儀作法の基本常識を教えてください先生を手配するようにお願いしたのだ。

時間が無い為ある程度の粗があるのは覚悟の上でも、せめて基本的な事だけでも覚えておこうと思つたからだ。

「ブリジステイン様について、何か知っていますか？」

「・・・才女だと耳にしたことがあります。けれど、それ以上は分かりません」

それでは実際にお会いした時を楽しみにしていよう。

「アルフレド、それでは本を持ってきて・・・いえ、別の方に頼みましょう。」

ファレリーさんはお手透きでしょうか」

護衛に専念する方がいいだろうと思いつアレリーさんと呼ぶと、アルフレドは緩く首を振って答えた。

「どうぞ前と同じように私に言ってお下さい。『それ』も含めた契約内容です。」

本の種類は前と同じで宜しいですか？」

傭兵らしく契約を強調しているけれど、アルフレドの好意もあるように感じられた。

心の内に思っていた事を教えてくれたお陰で、彼との距離が大分縮まったように思う。今のアルフレドならば、安心して背を預けられる。

契約や金額だけを教えられたとしても同じように力を当てにはしただろうけれども、このような安心感は生まれなかつただろう。

いつもと同じように魔術書を求めているのかと聞いてきたアルフレドに、「違います」と返事をする。

「この国と周辺国の歴史が書かれた物を」

準備することは山ほどあり、逸る気持ちが胸を締め付けた。

第二十二話

才女と言う単語から想像していた女性と、目の前のブリジスティン男爵令嬢はほぼ真逆と言って良いぐらいに異なっていた。

屋敷の良く磨かれた広間の床の上に優雅に立つ姿は、確かに貴族であるに見えるのだが。

質のいい服装と合わない目元を異常に強調し過ぎた化粧が、申し訳ないが、品を下げているとしか思えない。

おそらくまだうら若い女性である筈なのにその過剰な化粧の為に数歳は年上に見受けられた。

これがこの世界の一般的な貴族女性の化粧方法だとしたら、私はとてもついていけないだろう。

その感想を深く胸の中に仕舞いこみ、私は笑顔を作って頭を下げた。「初めましてブリジスティン様。わざわざお越し下さり、本当に嬉しいです」

私の為に来て下さった方である。私は気を害さないよう丁寧に挨拶したつもりだった。

しかしブリジスティン様は私を見て溜息を吐いた。少なくとも貴族ではないとの情報は聞いているのだろう。

予想はしていたが、普通の貴族などこんなものである。

「初めましてグラークさん。今日からリカルド様たつてのお願いで私が教師役を務めさせて頂きますわ」

リカルドの名前を強調して言った。嫌々なのは分かるが、それでも引き受けて下さったのは彼の顔のお陰に違いない。

今回は役にたつたが、余り愛想を振りまいていけるとその内嫉妬で修羅場に巻き込まれるのではなからうか。

そうさせた自分の事は棚に上げ、リカルドの女性関係を少々心配した。

「ところで、グラークさんはリカルド様とどういったご関係なのか

しら。

リカルド様は貴方の事を恩人に関係のある方とおっしゃってしましたけれど」

関係ある方どころか、本人である。リカルドも随分曖昧に誤魔化したものだ。

「・・・少々縁がありました。特別に目をかけて頂いてるのです」
嘘は言っていない。リカルドに負けず劣らずの曖昧な言い方に諦めたのか、それ以上の追求はされなかった。

「そうですか」

しかし平民かと見下した態度を隠すこともなく、返事は冷淡な口調だった。

そんな相手に余り下手に出すぎるともつまらない。意趣返してもさせてもらおうか。

「私自身、どうして目をかけてくださるのか良く分からないのです。けれどどこまで私にして下さるからには、私を近くに置きたいという目的でもあるのでしょうか」

「まあ、そうなの」

ブリジスティン様が色々と考え込んでしまっているのが傍目から見て分かった。

もしかしたら私がリカルドの養子にでもなる可能性があるかと、暗に示したのだ。

その誘導の通りに彼女は自分の中で答えを出してくれたらしい。

「これから暫く共に過ごす事になる訳ですし、私のことは名前で呼びになっても構いませんわ」

急に親身になってくれたブリジスティン嬢に笑いを噛み殺す。

これで私がリカルドの養子にでもなり彼女がリカルドの心を射止めたとしたら、お母さんと呼ばせるつもりなのだろうか。

女性らしい可愛らしさに沸き上がる微笑まじさを含ませて、笑みを浮かべた。

「ではハーシー様、宜しくお願ひします」

「ええ。それでは始めましょうか」
気を取り直し、授業がようやく始められた。

初日の内容はパーティーに呼ばれた時に覚えておくべき礼儀作法の導入だった。

一つの動作自体は簡単でも複数動作を覚えるとなかなか大変で、特に困ったのは相手の身分によって作法が無礼になる場合である。

自分の物覚えの悪さを恨みつつ、厳しく指導してくださるハーシー様と過ごしている内に時間は直ぐに過ぎてしまった。

見た目に反してかなりしつかりと教えてくださったので、ハーシー様を選んだリカルドの見る目には感心する。

そろそろ終わる頃合いだと思い始めていた時、入室の許可を求めるノックの音が広間に響いた。

「はい。どうぞ」

仕方なく授業を一時中断する。私の声を聞いて扉を開いたリカルドに、ハーシー様は目を輝かせて迎え入れた。

「リカルド様！」

声色すら一段と高くなり少女のように一途に駆け寄る。罪な男め。

いつもより早めの彼の帰宅は、授業が気になっていたのであろう。リカルドは騎士服のままの格好で口角を上げて笑顔を作り、ハーシー様に様子を尋ねた。

「引き受けて下さり、ありがとうございますハーシー様。」

初日の調子はどうですか？」

「苦手なところも見られますが、全体としては順調ですわ。」

やる気もありますし、直ぐに慣れてくれると思いますの」

「それは重畳。これからもよろしくお願いします」

ハーシー様と二言三言交わすと、リカルドは今度は私に向かって近づいて来た。

「ハルカさん、授業は捗っていますか？」

・・・余り根を詰めすぎず、適宜休みをとられて下さい。

貴方は真面目過ぎる方ですから心配です」

「リカルド様ほどでもありませんよ。」

今日は早く帰るために無理をしたのではありませんか？」

「いいえ。この程度苦にも入りませんよ」

本当だろつかと疑い顔色を見定めていると、ハーシー様が私に近寄り肩を両手で掴まれた。

「リカルド様、ハルカさんは優秀な生徒で本当に教え甲斐があります。」

私達、今日で随分打ち解ける事が出来ましたの」

そう言つて自分の体に私を引き寄せる。

恐らく仲の良さを訴えたいのだろうが、そのせいで豊かな膨らみが背中に当たった。女性同士であるので全く嬉しくない。

まだ誤解させたままである事を思い出し、笑いかみ殺して不自然な無表情になつてしまった。

「ええ。市井の出身とは思えないぐらい基本が出来ていて驚いておりますわ。」

これなら貴族の中には受け入れたいと申し出る方もいらつしやるでしょうね」

私に対するリカルドの態度を見て、私を誉めておいた方が好感度が上がると判断したのだろう。

けれどもリカルドは彼女の予想とは異なり、喜ぶ反応を示さなかった。

「そうですか・・・ええ、そうですね」

口では頷いている筈であるのに、表情は奇妙にひきつっている。笑うのを失敗したような顔だった。

「リカルド様？」

「何でしょう」

しかしハーシー様が心配して声をかけても何も答えなかった。自分で気づいていないのかもしれない。

追求しようとするも二人が歓談しだったので時期を逃してしまい、

その事を聞くことは出来なかった。会話は弾んでいたが、私の目には少々憂鬱であるように感じられる。

しばらく話していたが、窓の外の様子を見るとリカルドが切り出した。

「大分話し込んでしまいましたね。女性の夜道は危険です。

お見送りいたしましょう」

「あら、残念ですね。せっかく楽しいところでしたのに」

リカルドと少しでも長くいたいらしいハーシー様を、二人で玄関まで見送る。

最後まで熱い視線を送っていた彼女の姿が見えなくなってから、私はリカルドに話しかけた。

「ふふ、本当に女性らしい可愛いかたです。私がリカルドの養子になると、お思いらしいですよ」

「まさか、そう仰ったのですか？」

「いいえ。けれど誤解をさせる事は言いました」

「だからあの様な振る舞いだったのですか」

リカルドは納得すると、晴れやかな様子に変化する。

てつきり苦々しい顔をされると予想していた私は、妙に明るくなったりリカルドを不思議に思う。

私が彼の養子になると思われて嬉しくはないだろうに。それとも、私がハーシー様と近づく事がそんなに気に食わなかったのか。

いや、リカルド自身が連れてきたのだから、それは無いだろう。

結局彼の機嫌の良し悪しについてはよく分からないままだった。

しかしお咎め無しという事に満足し、それをリカルドに聞くことは忘れてしまった。

第二十三話

今日はハーシー様が用事があるとの事で、自習の日になった。そのため最も苦手としているものに取り組んでいたのだが・・・これはなかなか手間取りそうである。

リカルドが忙しい合間を縫って私に指導してくれている。その期待に応えたいと思うのだが、熱意が空回りするばかりだ。

アルフレドは部屋の壁の横に立ち、私の下手さに堪えきれず笑っていた。

傭兵だと知る前には無かった、簡素だがしつかりとした剣が一振り腰から下がっている。

剣を持たずにどのように私を守るつもりだったのかと聞いた時、その服の下から夥しい数の刃物を出した時は驚いたものだが、おそらく今でもそのままなのだろう。

「意外です。今のお姿からは、戦場を駆け抜けた姿が想像出来ません」

「・・・後方支援が任務だったから、ということにしておきましょう」

身体能力を上げる魔術はあるが非常事態でも無い・・・たかが、ダンスで使ってしまったら魔術にとても申し訳ない。

そんな邪道は使わず、自分の努力で克服したいところだ。

私を笑うアルフレドはどうなのかと問い詰めたが、見ているだけであるのに私よりも余程上手く踊って見せた。

元々体の使い方を良く知っている人に聞いてはいけなかったか。

腕を上げ、背筋を伸ばす姿勢を維持するのはまだ良いが、相手をリードするのはもうお手上げである。

女性型ならもう少し簡単だったと思うが、今の私に必要なのは男性型の踊り方だ。

余りにぎこちない私の動きにリカルドが見かねて言ってきた。

「私が一度ハルカ様と踊ってみましょうか。」

体格差も有りますし、失礼ですが女性型をお願いいたします」

「そうですね、分かりました」

接近され自然な動作で手を取られると、もう片方の腕を私の腰にまわす。

凹凸のある手や鍛えられた筋肉質な体が否応にも触れた所から伝わってしまい、普段女を捨てている私ですら胸がざわめいてしまった。比較して薄っぺらい私の体が子供のようで余りに貧相に思える。

相手が真面目に指導してくれているのに、私がそのように浮ついていては駄目だろうと自分を抑えた。

「顔はもう少し上を向いて」

「はい」

この位だろうかと探りながら、相手の肩まで視線を上げた。

「では、私の動きに合わせて下さい」

「はい」

最初はゆっくりと。次第にテンポを上げながら。

耳元からリカルドのリズムをとる声が入ってくる。

足捌きが複雑になると絡まり転びかける回数も増えてきた。

その度にリカルドがバランスを崩した私の体勢を、腕力でもって助けあげる。

リカルド通りに実行するとしたら私が男性型を披露する頃には、補助の為に腕力も鍛えなければ駄目だろう。

相手をしているのがかなりの上級者だとは知らずに、私は道の遠さに目眩がしそうだった。

「体の力をもっと抜いて、楽にして大丈夫ですよ」

「そうは言いましたも・・・」

なかなか難しい。緊張しているのは自覚しているが、どの部分の力を抜けばいいのか良く分からない。腰か？足か？手の先か？

そしてとうとう足がもつれ、私は彼の足を思いつき踏みつけてしまった。

「すみません！」

かなりの体重をかけて踏んだため、痛いだろうと慌ててリカルドに謝罪する。

しかしリカルドはその痛さを微塵も表に出さずに唇で弧を描き、さりりと受け応えた。

「小鳥がとまったのかと思いましたよ」

この言葉に私は耐えきれず、彼を突き放すようにして距離をとってしまった。

言われ慣れてない言葉に拒絶反応を起こしたと言って良い。

リカルドの余りの色男ぶりに色々と限界を感じた。彼の相手を平常心で務める事も難しいし、また彼のように自分が行えるとも思えない。

歯の浮くような台詞とはよく言うが、似合う人が言えばこれほどの威力があるとは！

「無理です！本当に男性は皆そのように振る舞うのですか？」

彼のような男前ならともかく、私が実行したところで失笑されるだけではなからうか。

笑われる自分の姿を思い描き暗くなる私に、リカルドが苦笑いしながら言った。

「私と全く同じにされなくとも大丈夫ですよ。」

踊りもハルカ様が嗜まれる環境で今までこられたとは皆思いませんし、音楽に合わせてある程度リズムをとれるのならば問題ないでしょう。

それに傍から私が離れる事はありません。何かあれば私が相手を引き受けます」

その言葉に本番では甘えさせていたどころ。

それにしても、本当にリカルドは女性の扱いが上手というか、慣れていた。

先ほどの言葉も大概の男であれば女性に鼻で笑われるだろうに、この男が言えば顔を赤らめて恥じらうに違いない。

これは間違いなく本人の自覚の有無に関わらず何人も影で泣かせている。

男であるなら誇らしい事かもしれないが、女の自分としては複雑な心境だ。

「リカルドは・・・人を気分良くさせるのが上手ですね。

思わず、口説かれていますのかと錯覚してしまいました」

軽口に等しい、彼ならばさらりと受け流すだろうと予測して発した言葉であった。

けれどもリカルドは思ってもみない事を言われたと驚き、羞恥で陶器のような白頬を赤く染め上げた。

「くどか・・・っ、そんなつもりは！」

慌てて弁明する彼の様子は明らかに戸惑いに満ちている。

勝手に人を誑かすのが上手な人間だと判断してしまっていたが、早合点だったか。

「私は単に、」

言いかけるが上手い言い訳が思いつかなかつたらしい、口ごもってしまったリカルドは額に手を当て首を横に振った。

「・・・済みません、失礼します」

リカルドは顔をまだ薄紅色にしたまま逃げるように足早に部屋を後にした。

残された私とアルフレドは顔を見合わせる。

「思った以上に純粹、なのでしょうっか」

私の言葉に何か言いたげなアルフレドだったが、雇い主を慮ったのだろう。一言だけに止まった。

「・・・一概にそうとは言えないと思いますけどもね」

第二十四話

人が寝静まり、月と黙しか起きていない時間帯の事である。

誰かの声が聞こえた気がして私は眼を薄く開いた。

部屋の中は濃い闇の色しか見えず、窓の外もまだ暗く朝は遠いように思えたので、使用人達の目覚めた声ではないようだ。

寝ぼけた頭のままうめき声などを漏らした気がしたが、定かではない。

しかし次の声で、私は布団を蹴り上げ転がるようにベッドを飛び出した。

「不審者数名発見！起きて下さい！！」

手元もおぼつかない暗さであったが、明かりを点けるのはこちらの居場所を教えるようなものだろうと躊躇われた。

枕元にいつも置いていた小振りの剣を手探りで持ち、窓に向かって構える。

外からは剣戟の懐かしい音が聞こえ、他にいくつかの指示するような声も混じって届く。

この部屋の外壁は窓枠に道具でもかければ登れる構造になっていた。扉の方はリカルドが守るだろうと想定し、いち早く来そうな窓に警戒を向けた。

そこまで考えてから魔術を自分に唱える。練り上げられた魔力が筋繊維の段階まで影響し、細いこの体の力以上のものを引き出す筈である。

先ほどの声はアルフレドに違いない。庭の方からだった。

ならば此処までたどり着くまでの時間は後少し。

小さな音が聞こえたので窓の外を矢を警戒しつつ覗くと、二人が鉤のついた縄のような道具で登ってきていた。

部屋の場所まで調査済みか！

こちらの居場所が知られているのなら、隠れるよりも打って出てしまった方が得策だろう。

部屋にあった重そうな置物を、窓を開け放ち侵入者の一人に落とすてやった。

蛙に似た声と大きな落下音が聞こえたので、こっちはもう相手にしなくていいと思われる。

もう一人の縄を切ってしまうおうと考えたのだが、金属でも編み込みであるのなかなか魔術で焼ききれない。

手間取る内にととうこの部屋までたどり着かれてしまった。

片手で窓枠をつかみ、もう一方の手で短剣を私を突き刺そうと繰り出してきた。

半歩下がってそれをかわしたが相手は部屋に完全に乗り込んだ状態になってしまう。

暗がりに浮かび上がったのは、頭まで全身を黒い装束で覆い隠した暗殺者の姿だった。

互いに殺意の漲った視線を交わし合う。高ぶった興奮が私の脳内に唯一つの命令を下した。

殺される前に、殺せと。

構え直し持ち上げた剣は強化された腕力により木刀よりも数段軽く感じた。

それを本来の重量と共に渾身の力で相手に向かって切りかかる。

相手は小柄な私の攻撃に片手でそれを相手取るうとしたが、予想以上の力に表情を変え直ぐさま両手で持ち手を握った。

今の一撃で致命打を与えたかったのだけれども、仕方がない。

戦いが長引けば近接戦に慣れていない私の負けは確定している。

相手がこちらの出方を伺っている内に、奇抜な方法で勝ちを得るか選択肢はないのだ。

下ろした私の剣と受け止めた相手の剣が鏝迫り合い、力比べの状態となってしまう。

無理矢理体を動かしている私と相手では、私の方が勝っているらし

い。

けれども相手の必死の抵抗により均衡が保たれ、震える腕越しに睨み合った。

相手にこの状態から何か小手先の技でも出されたら堪らない。

何か相手から起こされる前に私から行動を起こそうと、魔術を小声で唱える。

近距離で何か放たれる事を警戒して相手は大きく後ろに後退し、均衡した状態を解除すると、剣を再びこちらに向かって突き刺すべく鋭く向けた。

しかしそれこそ私の狙い通りである。その頃合いを見計らって唱えていた術を発動させた。

相手が息だけで驚きの声を上げたのが間近で聞こえる。

私を貫こうと襲いかかった凶刃が、突如としてその刃先の方角を変えたのだ。

まるで壁に重力がかかったかのように剣が壁に引き寄せられているのである。

同時に相手の体自体もその服の下が、所々壁に向かっておかしな膨らみを作り上げた。

仕掛けは簡単に電気磁石の仕掛けを壁際に置かれた動物を象った置物に組み込んでおいたのである。

私は自由の効かない自分の剣を手放した。剣は置物に向かって滑るように引き寄せられる。

そしてその一瞬、僅かな間戸惑った相手の腹を容赦ない力で蹴り上げた。

魔術によって瞬間的に上げた力で腹の膜を破る感触が足から伝わる。「ぐあつー!!」

呻き崩れるように床に倒れ込む。もう十分だろうか、いや、まだ足りない。

私は彼の背中を踏みつけ固い背骨をへし折った。

続けて上がる悲鳴を聞き、微動だに出来なくなった様を見てようや

く私は相手から視線を逸らす。

窓を再び見ると新たな来客が来ていたので、今は伏している暗殺者の剣を奪い投げつけた。

運良く新たな一人は入ってこようとしていた最中だったので、よけきれずに胸板でそれを受け止めることとなった。

黒い影がその勢いのまま背中から外へと向かって落下していく。

後続が窓からやって来ない事を確認し、息を整えるだけの時間を得ることが出来た。

一見私が有利に見えるかもしれないが、体の強化など一時間も連続して行えば再び療養生活に戻ってしまうに違いない。

何より他にも気がかりな事がある。

仮にも魔術師の殺害をもくろむのなら、数を揃えるか同じ魔術師をつれてくるのが常道だろう。一体そのどちらか。

荒々しい足音と共に、リカルドがドアを勢いよく開き部屋に駆け込んできた。

寝間着では無く普段着で剣を持つところを見ると、今夜のような日を想定して備えていたのかもしれない。

紅潮した頬に飛び散る血が、この部屋に来る前に戦っていた事を示していた。

「ご無事ですか!？」

「私は大丈夫です。貴方は？」

「問題ありません」

リカルドはどうやら怪我をした様子も無く、本人の言うとおり心配しなくても良さそうだった。

無事な姿に安心した時、窓からの明るい光が部屋の中をちらつかせた。

彼方の方角はアルフレドの声が聞こえた方向と一致している。

私は窓に駆け寄ると、暗殺者が使っていた道具を伝って勢いよく下に降りた。

「お待ち下さいー!」

窓から身を乗り出したリカルドの声が上から聞こえたが、応えずに走り出した。
アルフレドが、一人魔術師と戦っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173o/>

払暁

2011年11月23日00時08分発行